目　　　次

研　究　発　表　概　要

第180回研究会（2014年1月25日）

最近のモチベーション研究からみた英語学習ストラテジー

東京工科大学　植田 麻実

この発表は、第二言語習得におけるモチベーション研究に関する先行研究を紹介し、近年のモチベーション研究の視点から、学習者が使用している英語学習のやる気を維持するストラテジーに関してリサーチ結果の紹介であった。リサーチは、大学生1059名へのアンケートから、英語学習が成功するために最も重要と考えている要因を、1）自分自身、２）教師や教材カリキュラム、３）日本社会における英語の位置づけ、の中から1つ選んでもらった。結果、6割の実験協力者が、成功のカギは自分自身との回答結果を得た。また先行研究から抽出した50項目の英語学習のやる気を維持するために使用しているストラテジーに関しては、探索的因子分析の結果、将来自ら英語を駆使するイメージを持つことが、他の因子とも最も結びつきが強く、英語学習のモチベーションを維持するために重要であることが分かった。予想に反して Facebook、e-mail、YouTube など最近登場したいわゆる SNS と呼ばれるものは、英語学習のやる気と結びつけたストラテジーとしては使われていないことも判明した。

日本の名所・旧跡に見られる案内板の英語

文教大　福島 一人

2020年に東京でのオリンピック開催が決定し、さらなる外国人観光客の増加が見込まれ、日本の名所・旧跡における、特に英語案内板の質的、量的充実が望まれるようになっている。本発表では、名所・旧跡であり、世界遺産に指定されている広島県廿日市市宮島に限定し、数枚の「一般的な案内板」「当該名所・旧跡に特有な事物の案内板」について検討を加えた。英語案内板の文法的誤り、日本語案内板との矛盾点などを明らかにした。重要と思われるもので英語案内板が存在しない場合提案し、また、日本語学習者のため、固有名詞などの英文字表記についての提案をおこなった。

尚、英文の文体や、表題などの大文字・小文字の表記などについて、今回は、現地の案内板のものに原則として従うことにした。ネイティブチェックは David Martin 氏にお願いした。画像はすべて、現地にて発表者が 2013.4.26 と 2013.12.22 に撮影したものである。

第38回年次大会（2013年９月14日、15日）

グローバル人材育成のためのソフトスキルを活用した英語教育

東洋学園大　下山 幸成

本発表では、グローバル人材育成の一環として行っている「ソフトスキル」を活用した英語教育に関して、本学全体の取り組みと個人での取り組みを報告した。ソフトスキルとはプレゼンテーション能力、論理的に物事を考える力、交渉力、協調性といった日本語を使うのと同じような教養・態度・感覚を指す。大学全体での取り組みとして、英語教育開発センター（以下 EEDC）科目内容と教養教育センター科目内容の連携、EEDCと国際交流センターが行う留学支援の連携、英語でのコミュニケーションの場「English Lounge」と単語集『TOGAKU英単2000』とスタンプカードの活用事例を報告した。個人での取り組みとしては、マナー指導法、ソフトスキルを英語授業に取り込む方法、具体的な活動内容を報告した。最後に、学習者からの反応を報告しながら、ソフトスキルを育み活用する指導は英語の苦手意識に触れずに英語力を伸ばす芽を育てるために有効であることを示唆した。

日本人が混同しやすい英語類似表現

大場　智彦

前回の年次大会で扱った「イディオムの定型訳の改善点」に関連付けて、教育現場で学習者だけでなく指導者も陥りやすい英語類似表現の混同の実例を取り上げた。そのほとんどは、以前よりもはるかに向上した辞書の定義をしっかりと参照すれば意味や用法の区別ができるものではあるが、いまだに学習者が日本語訳や形の類似によって混同しがちなもので、中には指導者も確認の機会を逸したまま自らの mental lexicon「心的辞書」に安易に「Ａ＝Ｂ」として定着させてしまっているものもある。if not... と unless...、after all と at last、recently と these days、what is called と so-called など、今回紹介した例は、私自身の経験で知り得たもの、日本人の用いる英語の特徴をよく知るネイティヴ・スピーカーや日本人英語語法研究家が指摘しているものの中のごく一部ではあるが、これらの例を吟味することで指導者や教材編集者が類似表現の扱う際の説明の改善に役立つと思われる指摘をさせていただいた。

タブレット端末の英文マニュアルで使用される動詞の複合語

文教大　高橋　信弘

本研究の目的はタブレット端末の Apple と Sony のマニュアルから、動詞を含む複合語には複合名詞が多く、複合形容詞や 複合動詞は極めて少ない。これらの複合語は新語を造ることの仮説を明らかにしたことを下記のように発表した。

１．Williams (1978) 複合語に関した右側主要部の原理を活用して、動詞を含む複合語を品詞別に分類した結果、下記の通りである。

⑴ 複合名詞、複合形容詞、複合動詞の順位で複合語が使用されている。AppleはSonyより動詞を含む複合語の使用回数が４．８倍と高い
⑵ Apple 社は動詞を含む複合名詞について、主語と動詞から成る型（N+V）並び動詞と目的語から成る型などを３０％と均等に活用。
⑶ Sony は動詞と目的語から成る型の複合名詞は０％。

２．動詞を含む複合語の新造力：
⑴ 複合語に接辞（-ing,-ed）などを付加させて、品詞を変えて新しい複合語を造り出す。
a）複合名詞：troubleshooting
b）複合形容詞：fact-finding

⑵ 企業独自の造語には下記の複合語がある：
Apple社： Double-tap、 Passcode 、 Screenshot、Slideshow
Sony社： Single-tapping

英語習熟度別クラスと
一般クラスの教育効果

青森公立大学　香取 真理

入試制度や、学生の英語能力の多様化に対応するため、現在多くの大学では、英語習熟度別クラス編成を採用している。今回は、東北地方にある一大学を例にとり、習熟度別クラス編成を行った２年間と一般クラス編成を行った２年間で習熟度に差異はあるのかについて、主にG-TELPの結果をもとに分析・検証を行った。４年間の G-TELP 結果を検証した結果、習熟度別クラス編成と一般クラス編成の間に若干の変化が見られた。一般クラス編成では、リーディング力は向上した一方、リスニング力は向上しなかった学生が増えていた。しかしながら、全体的英語能力に関しては量的に大きな差異は見られなかった。また、学生の意識調査アンケートでも、習熟度別クラス編成を希望する割合は20%に留まっていた。今回の結果を一般化する事は難しいが、「習熟度別クラス編成」の効率性よりも、カリキュラムデザインや教授法等、授業環境に関する要因がより学生の習熟度には重要であると思われる。

大学生の英単語学習ストラテジー使用実態

東北工業大学　佐藤 夏子

外国語学習ストラテジーとは外国語学習の際に、学習者が取る方法・行動の中で、ある学習段階において、特定の活動に単独あるいは組み合わせて利用されると、活動の遂行や対象言語の習得が容易になったり、効果的になったりする可能性を持ったもので、学習者によって意識化できるものを言う。

本研究の目的は、大学生の英単語学習ストラテジーすなわち英単語を学習する方法や行動を知り、さらに、大学生が実際に使用している英単語学習ストラテジーと英単語学習　学生が実際に使用したストラテジーを問う項目31問、同じストラテジーについてのビリーフを問うもの31問の計62問からなる質問紙を作成し、学生に回答してもらった。

その結果、学生が、最も効果的なストラテジーであると考えており、実際に自らも最も活用しているのは筆記リハーサルであることがわかった。また、効果的であると思っていても、使用が限られているのは、音声リハーサルであった。一方効果的であると思っていても、利用できない（しない）のは、記録ストラテジー、あるいは言語接触ストラテジーであった。

調査対象となったような英語学習に対する動機付けが比較的低い学生に対しては、教師が学習ストラテジーの指導をする必要があると感じた。

米オークションサイト eBay で使用されるビジネス英語表現

拓殖大　藤本 淳史

世界最大規模の米オークションサイト eBay は1995年に設立され、2011年12月31日時点でのアクティブな総ユーザー数が1億40万人にのぼる。eBay 自体は商品を売るのではなく、あくまでオークションを提供する場であるが、ユーザー同士が取引をする上で、最も重要といわれるものは「信頼関係」である。それを構築するための手段として商品説明などが簡潔かつ適切に提示される必要がある。この発表の目的は、第一に、eBay や eBay の関連文献では、タイトルの表示方法において、どのようなガイドラインを提示しているのかを明らかにすることである。第二に、具体的な実例からどのような英語表現が使用されているか探ることである。発表者は、ガイドラインを再編成しチェックリストを作成し、実例にあてはめて精査した。今後は、eBay で顧客に対するページでの英語表現の特徴を探ることや、他のオークションサイトとの比較をし、eBay 独自の表現方法があるかを分析することである。

日米企業のWebページ比較

東京工科大学　神谷 明美

今や多くの企業がインターネット上に自らの Web ページを作成、そこに事業概要や製品情報・広告だけでなく、財務情報や求人情報までも掲載するようになっている。さらに、ここ数年は、企業が Facebook や Twitter といった SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）など新たなインターネットサービスを使って情報提供をすることも増えてきた。そうしたなか、グローバルに展開する日本企業にとって、インターネット上での情報発信、特に英語での情報発信をいかに有効に行うのかがますます重要になってきている。今回の発表では、日米の大手企業（日本:25社、米国:30社）の Web ページを中心に概観し両者の比較を行った。総じて、米国企業の方がインターネット上の情報発信を有効活用しようとしており、Web ページ上に Facebook や Twitter へのリンクを貼るのも積極的であった。ただ、米国企業でも SNS の取り扱いについてはまだ模索しているようである。

Politically Correct における推奨語のコーパス分析

拓殖大　谷岡 亮

昨今、日本においても英語は不可欠なコミュニケーションツールとなっていると言っても過言ではない。一方、英語を使う機会は増えているものの十分な文化的背景を理解することなしに英語を使うことは、相手に誤解を与えたり、不快にさせてしまうなど互いの信頼関係壊しかねない。言語的な面から差別を取り除き言語的な配慮平等を試みるPolitically correct（政治的に妥当、以後 PC）現在、アメリカではほぼ一般的なレベルにまで浸透している（宮本、1999）。女性の社会進出が目覚ましい今日、PC の理解はビジネスのみならず日常においての文章作成に不可欠の要素といえる。PC 運動によって代替語のとして使用を推奨される語が実際にどの程度、文語において使用されているか、コーパスを使用しその使用状況の考察を試みた。分析の結果、Police officer、Fire fighter のように代替語が厳密に定まっているほうが、Business person、Chair person のようにperson をつけている代替語よりも定着度が高いのではないかという結果が導かれた。

ESP教育に適用できる英語科学雑誌コーパス分析

法政大　小屋 多恵子

本発表は、自作の英語科学雑誌コーパスを構築し、そこから特徴的な語や表現を抽出し、今後の語彙表作成ならびに指導の道筋を考察することを目的とした。法政大学理工学部創生科学科の学生を対象に、Reviews of Modern Physics の2年分の資料をテキスト化し(以下 RMP コーパス)、フリーのソフトウェア Antconc を使用して分析した。分析結果として、RMP コーパスでは、科学の分野で使用される名詞、動詞の過去分詞、大きさを表す形容詞、人称代名詞 we、fig, eq といった短縮形、due to, in terms of, as well as といった定型表現が特徴語としてあげられる一方で、we以外の人称代名詞、曖昧表現につながる恐れがある could, would, might は使用を避ける傾向にあり、さらにつなぎ語の however, moreover, therefore, thus は、特別科学雑誌に多く使用される語ではないことが判明した。実際に教育に活かしていくためには、ニーズに基づく更なるコーパス構築、分析、結果の精査が必要であると考える。

日英語のモ ダリ ティとポライトネス

日本大　黒滝 真理子

本発表の主眼は英語との対照の観点から日本語のモダリティ論の体系化をは かることにある。日英語話者間には事態把握（construal）の仕方において 相違がみられる（池上 2000）。その異同をモダリティ論に援用すると、客観的把握型の英語は deontic modality をプロトタイプとし、主観的把握型の日本語は epistemic modalityをプロトタイプとする（黒滝 2005）。それゆえ、日本語は epistemic modality から意味拡張される周辺的モダリティが複雑多岐にわたっている。その一つの evidential modality も プロトタイプの epistemic modality が状況可能を介して間主観化を起こしポライトネス表現へと拡張したものである。一方、英語はプロトタイプの deontic modality から間主観化が起こりポライトネス表現になる。このためビジネス英語においても deontic modality のみの限定解釈しかなされず、コミュニケーションギャップを引き起こしている。総じて事態把握の異なる日英語間には異質の間主観化が存在することを論じた。

Application Letter の
効果的な論理構成

拓殖大　本橋 朋子

欧米では、就職活動において、履歴書と共に応募の手紙（application letter）を提出するのが一般的である。Application letter の目的は面接にこぎつけることであるため、自分を上手く売り込み雇用者を説得できる文章力が問われる。そこで、本発表では、application letter の役割を確認し、説得力のある applicationletter 作成のための論理構成を考察した。

Application letter は、履歴書の単なる要約ではなく、応募者の資格、業績、経験などを詳細に説明することにより、職への適性や応募理由を採用担当者に伝える重要な役割を担っている。レターを読みやすくするには、本文を Introduction, Details, Closing の三部構成でまとめるとよい。特に業績を具体的にアピールするDetailsでは、職務要件と応募者の資格、業績、経験などが合致していると一目で分かる “T- format”が最近では好まれている。

クレーム・メッセージの英文作成技法

聖徳大学　青柳由紀江

クレーム・メッセージ作成に対する日本人学習者のレディネスを、ケーススタディにより確認した。ビジネス専攻の約60名の学生を対象に、広告料金請求に対するクレーム・メッセージ作成を課題とし、「主張」(Claim) の技法である三角ロジックとその原型とされる Toulmin Model を参考に分析した。すなわち「事実・データ」(Data) から「主張」(Claim) へと繋げるための「理由」(warrant) とその「裏付け」(Backing)について、状況から的確にそれぞれを提示できるか分析した。その結果、「事実」と「理由」の説明については8割前後の学生が提示したのに対し、「裏付け」と「主張」の提示がそれぞれ3割前後と不十分であったため、クレーム・メッセージ作成時には重点的に教示する必要があることが明らかになった。また米国人研究者によるモデル・メッセージから、各項目内容を提示するのに有用な英語表現を抜粋し、各項目内容を意識できるよう合わせて教示することを提案した。

第179回研究会（2013年5月18日）

グローバル時代の企業で必要な英語(2)

篠田　義明

長年英語を勉強しても、卒業後実務で使えない、その理由は何処にあるのか。文科省は小学校から英語を授業時間に取り入れたが、小学校から英語嫌いになったら救いようがない。なぜ大学の英語教育を真剣に考えないだろうか。英語の style を大学で指導していないことに一つの大きい理由があると思う。大学での英語教育に style を取り入れれば、卒業後に実務での英語が使いこなせると同時に日本語の論理構成も明確になるので、英語の style の重要性に焦点を当てて、大学に於ける英語教育の指針を述べる。

第178回研究会（2013年1月26日）

「ビジネス英語」を考える

秋山　武清

ビジネス英語現象を分析してその特質を研究する場合、専門語句や準専門語句がその特質とされることが多い。専門語句は当該分野の概念規定であり、準専門語句は専門語句以外で、当該分野で好んで使用される語句である。専門語句と準専門語句をまとめて「ジャーゴン」と言える。特質研究によるとジャーゴンが普通英語との示差的特質とされがちであるが、ジャーゴンの多寡はビジネス英語とは本質的に何ら関係がない。ビジネス英語の本質は「ビジネスの促進遂行を意図する英語による動的な言語活動」と言えるので、ジャーゴンの使用はビジネスを促進するか否かによって決定すべきである。専門家同士の場合にはジャーゴンの多用によりコミュニケーションは効率的に促進され、素人同士や相手が素人の場合にはジャーゴンを使用しない方がコミュニケーションは促進される。このように本質を把握することによって、われわれはジャーゴンの呪縛から解放される。

第37回年次大会（2012年９月15日、16日）

英語イディオムの「定型訳」の改善点：
not to say などを中心に

都立青山高　大場 智彦

多くの英和辞典では長年の度重なる改定を通じて各語の語義の訳例が実際の使用場面に即したものになってきているが、その一方でイディオムの意味を紹介する多くの教材では今でも従来どおりの実態に合わない「定型訳」が示されており、英和辞典でも一部のイディオムに関しては、その定型訳が第一義として紹介されている。今回の発表では主な英英辞典などの記述を参照しながら「～とは言わないまでも」という意味で解釈されることの多い ＜not to say ～＞ が実際には「いやむしろ～と言ってもいいくらいだ」 という意味であることを確認した上で、＜be willing to ～＞ など意味を誤解されやすい他のイディオムの定型訳を吟味し、その改善点を指摘してみた。辞書や教材で紹介される不適切な定型訳が解釈での誤解のみならず、発話、作文における誤使用につながってしまう危険性がある以上、辞書、教材の編集者、そして指導者のさらなる検証を期待したいものである。

基本コロケーションリスト作成
のための一考察

小屋　多恵子

本発表では、日本人英語学習者が学ぶべきコロケーションリスト作成に必要な基準を考察し、試行した結果を報告した。現在出版されているコロケーション・ワークブックや中学校・高等学校で使用されている検定教科書は、掲載されているコロケーションが異なるため、学習者は使用した教材によりさまざまなコロケーションを習得することになり、学習段階ごとに本当に必要なコロケーションを効率的に習得することができない。そこで、コロケーションの客観的基準と主観的基準から基本語と共に学習すべき共起語を決定するまでのプロセスを提案し、その一例としてtimeと共起する動詞の基本コロケーションのリストを発表した。最後に、選定基準や要素の再精査、さまざまな語彙的基本コロケーションリストとそれを学習する効果的練習問題の作成を今後の課題とした。

実践的運用能力育成を目指した英単語集の作成とその効果

下山　幸成

本発表では、本学で独自の単語集を作成した目的と作成過程を説明し、活用実践を示し、活用後の効果を報告した。英語教育開発センターのプロジェクトの１つとして、昨年度に1000語の試行版を作成し、今年度に2000語の完成版『TOGAKU英単2000(2012年度版)』を作成した。これは、使用する学習者の様々なレベルを考慮しながら2000語に収め、学習者の語彙力増強・文法力強化・発信力育成を目的としたものである。作成過程では、本単語集の特徴である語彙選択、訳語選択、例文作成の３点について紹介した。活用法としては、冊子自体の使い方、繰り返し継続学習を促すための“Quizlet”というウェブサイトの使い方(無料)、学習意欲を高めるためのスタンプカードの使い方、隙間時間での学習を促すためのスマートフォン用教材を紹介した。活用後の主な効果としては、単語学習が身近なものになり、使うことを意識した自発的学習を行うようになったことが挙げられる。

ビジネス英語教育に有用な語彙：アニュアルレポートを中心として

神谷　明美

大学でのビジネス英語教育では、いわゆる教科書や英字新聞な どの報道記事がよく使用される。今回の発表では、こうしたものに加え、企業のアニュアルレポートを有効利用できないかと考え、主に語彙の難易度を中心に考察した。アニュアルレポートは元来株主を対象とした年次事業報告書であるが、現在では、広く一般を読者として想定した内容になってきている。今回、米国の大手IT企業5社のアニュアルレポートの「経営陣からのメッセージ」と「事業報告」部分に使用されている語彙をＪＡＣＥＴ８０００（大学英語教育学会基本語リスト）をもとに分析したところ、レベル８を超える語彙の比率は約１７％と一般的な大学入試の分析結果と同じとなり、大学初級の学生の教材としても十分使用できる難易度であることがわかった。企業活動の実際が学べるアニュアルレポートは内容的にも実践的といえ、今後大学での英語教材として積極的に取り上げるべきだと考える。

タブレット端末の操作に使用する英語

高橋　信弘

本発表はマルチタッチ方式のタブレット端末の操作に使用される独特な英語の単語“tap”, “flick”, “pinch”, “swipe”, “drag”, “scrub” などは派生語や複合語から作られた単語でなく既存の語に新しく意味を表す technical term であることを Apple 社の Instruction Manual から iPod touch の調査・分析の考察から以下の３点について明らかにしたことを発表した。

１．上記の独特な英語の単語は派生語や複合語から作られた単語でなく、これらの単語は既存の語に、操作の目的に適合した概念の意味を表すtechnical termsである。

２．これらのtechnical termsはone sentence /one operation（一文対一操作）の意味に対応する指示文の命令形を表す動詞である。

３．操作の使用場面の頻出数の面では、これらのtechnical termsは基本操作よりはアプリケーション操作場面で多く出現する。

インコタームズ2010とウイーン売買条約の危険移転に関する規定の比較

大島　英雄

インコタームズ（Incoterms）とは International Commercial Terms を略したもので、国際商業会議所（ICC、International Chamber of Commerce）が制定している貿易条件（Trade terms）の 解釈に関する国際規則である。 2011年1月1日よりインコタームズ2010は発効され、11のtrade termsに集約し、２Group構成とした。

発表者は2011年の全国大会で「インコタームズ2010における用語の解釈」というタイトルで改定ポイント、構成、新たな Trade terms の DAT 及び DAP の説明（英語・日本語）、売主買主の義務、 危険の分岐点、及びウイーン売買条約（CISG）との関係を発表した。

また、2009年の全国大会で「ウイーン売買条約（CISG）における英語」というタイトルで「インコタームズ2000」と「ウイーン売買条約」との規定の内容の比較等について説明し、英文契約書にどのように記入したらよいかについて説明した。

2012年の発表では主にインコタームズ2010とウイーン売買条約の危険負担に関する規定の比較を行う。尚、両者にはそれぞれの規定が述べられているが、規定に相違する時には、ウイーン売買条約第６条の「当事者自治の原則」によりインコタームズの規定が優先する。

英訳された刑法におけるshallの問題点

熊木　秀行

本発表では、日本の刑法の全条文とその英訳とを比較し、ほぼ全ての条文訳に登場する法律英語としての shall の使い方について考察を行った。法律用語としての shall は通常の Shall I…?（提案）や Shall we…?（勧誘）といったものとは異なった使われ方をしている。本発表では、英訳された刑法条文を原文と比較しながら、(1) shallが訳として使われる文脈、そしてshallの意味についての調査結果、及び (2) 英語母語話者がそれぞれの英語訳条文をどのように解釈しているのかの調査結果の２点につき言及した。

英語法廷通訳における訳語選択

佐藤　夏子

法廷通訳人は、日本で行われる裁判において、被告人が日本語を解さない、あるいは理解することができたとしても十分に裁判でのやりとりを日本語でできないと裁判所が判断した場合に任命されることになっている。通訳人は、全員に公平公正な手続きを担保するために正確な通訳を心がけなくてはならないことになっている。発表者は、英語の「法廷通訳人」として地方裁判所に登録をしており、これまでに東北地方の裁判所における英語を話す外国人の裁判に関わる通訳、翻訳を依頼され、担当してきた。

2011年、英国人英会話講師の殺人と強姦致死罪の容疑で起訴された市橋達也被告の裁判員裁判があり、この裁判には被害者の両親が被害者参加制度を利用して参加していたこともあり社会の注目を大いに集めた。この両親のために通訳人が存在したが、通訳人の訳語選択が必ずしも正確ではない場合があり、通訳ミスがあったことが指摘されたことから、法廷通訳人の質についても注目されることとなった。しかし、その背景には法廷通訳のおかれた環境がよくないことを発表者自身の法廷通訳の経験を踏まえて論じた。他にも法廷通訳をめぐる問題点について指摘した。

英字新聞を使った効果的な授業

植田　麻実

佐藤正和　(2006)『英字新聞攻略法入門編』の「ヘッドラインにおける９つのルール見出し（headlines）　の特徴」をもとにして、大学生が、英字新聞を、主にヘッドラインを理解することによって内容を把握する練習を１０週間に渡って行ったアクティビティの紹介であった。毎週１本教師が用意した記事の中で、一番印象に残った記事に関しての感想を個人またはグループで英語で書きそれをまとめたクラスでのアンソロジーを作成した。リサーチ・クエスチョンとしては、英語のレベルがあまり高くはない学習者にとって、英字新聞といういわば authentic material を理解することがどのくらい可能であろうか、というものであったが、学生たちはヘッドラインから記事の内容の概要を把握することに次第に慣れていったようであった。反省点としては、いくつもの違ったものがアクティビティに混ざっていたため、焦点をしぼったほうがよかった。

英語論文の Dos & Don’ts

大本　道央

英語で論文を書く場合、一般的な英語力あるいは論文以外の文書作成能力がどんなに優れていても、それだけでは不十分である。他の文書同様、英語の論文にも特有の形式・内容構成・語句・表現があるので、それを知り、使いこなせなくては効果的な英語の論文は書けない。日本語で書いた論文・草稿を英訳すればそれで英語の論文になるくらいの程度で考えているのか、ただ単に日本語の語句・表現を辞書などで調べ、英語に換えているだけと思われる日本人が書いた英語の論文もよく目にするが、なんともお粗末な出来である。英語の論文と日本語の論文とでは、形式や内容構成のみならず、表現方法や言い方の違いなどもあり、それらを把握し、反映させて書かなければ、効果的どころか、自分が意図した内容を伝える論文すら書けない。

発表では、日本人やネイティブが書いた効果的でない英語の論文を例にあげ、それらのどこが効果的でないかを指摘し、どうすれば効果的になるか論じた。発表は形式、内容構成、文法・構文、語法、語句・表現といったテーマごとに行った。発表により、英語の論文を作成する場合に注意すべき日本人が犯しがちな間違いを知り、どうしたらそれを犯さず、より効果的な英語の論文を書くことができるか理解するための一助になったものと確信する。

大学教育における「ビジネス英語」の現状

青柳　由紀江

日本の大学における実務的な英語教育の現状として、関東圏の主要20大学を例に科目の名称や内容を調査するとともに、今後の傾向について考察した。まず名称では、英語名を含む「ビジネス英語」が最も多く、次が「ビジネス・コミュニケーション」であり、一方最も少なかったのが従来の「商業英語」で1大学1学部のみであった。また「会議英語」や「ディベート」など、より細分化・専門化された名称が見られた。次に内容では、輸出入業務に関連した英語である「貿易取引とビジネスレター」を中心とした従来の授業は、「商業英語」、「貿易英語」の名称で実施されていたが、他は名称に関わらず担当者によって選択されていた。そして今後の傾向としては、「ビジネス・プレゼンテーション」が科目名称、内容ともに増加しており、また文部科学省の調査も含めて専門科目の英語授業やネイティブ・スピーカー担当授業の増加も確認した。

第177回研究会（2012年5月19日）

視覚補助を伴うシャドーイングが読解力に及ぼす効果

武井　　修

言語習得におけるワーキングメモリの機能に注目し、モデル音声を瞬時に追う音読練習方法であるシャドーイングが、視覚的な補助(挿絵や発音補助記号)の有無によって読解力の向上にどのように影響するのか調査した。先行研究では記憶と処理を同時に行うワーキングメモリと読解力の関連性を支持している。また、読解の認知過程には文字情報の音韻化が不可欠であることから、音読練習が読解力の向上に関与するという仮説を導く。検証には実験的調査方法を採用し、高校３年生の３クラス合計84名を対象に３か月間の学習効果を計測した。実験期間の事前と事後に各クラスの読解力を測定し、その結果を統計的手法で分析した。その結果、従来のｔ検定によるｐ値からは有意差は認められなかったものの、「効果量」を算出した結果、一定の効果が認められた。最後に今後の継続調査の方法を示している。

Split Infinitive の検証：1語による「分離」

中畑　　繁

コーパスを利用して調査した結果、Split Infinitive（分離不定詞）は増加傾向にあることがわかる。多くの文献にある通り、「相手に明確に意味内容を伝えられないときは、Split Infinitive の使用は避けられない」。

本発表では、(1) 歴史的な経緯Prescriptive vs. Descriptive、(2) 発表者が集めた実例、(3) 時間の経過とともに右肩上がりの状態、(4) 不定詞を分離する副詞頻度上位語、について言及した。

さらに、今後の計画として、(1) 特定の副詞・動詞の共起（例：to better understand）、(2) 複数語による「分離」（例：to sort of call）について調査することを明らかにした。

主として使用したコーパスは、BNC（British National Corpus）と COCA（Corpus of Contemporary American English）である。

第36回年次大会（2011年９月17日、18日）

シンガポールの中華系社会における言語の役割の変容

原田　慎一

中華系シンガポール人の母語は、英語、華語（中国語）、または中国語方言（福建語、潮州語、広東語等）である。それら3つの言語の役割は同一ではない。本発表では、シンガポール政府によって実施された1980年から2010年の国勢調査の結果をもとに、著者による調査結果や他の研究を踏まえ、シンガポールの中華系社会における英語・華語・中国語方言の役割を考察した。さらに、言語の役割の変容について論じ、英語・華語・中国語方言使用のポリグロシア（三言語使用で各言語が機能を分担）から英語・華語使用のダイグロシア（二言語使用で各言語が機能を分担）になりつつある現状を社会言語学の視点から明らかにし、さらに将来についても、英語が華語に代わって主たる機能を担うバイリンガル社会になるであろうという予測を試みた。

日本の城郭案内板の英語

福島　一人

福島(2011.1)、福島(2011.7)では、「一般的案内板」、「一般的な城郭の案内板」、「その城郭特有の事物の案内板」、「その他の案内板」に分類し、さらにそれらの案内板を、「日本語説明と英語説明がほぼ内容が平行していると思われるもの」、「日本語説明が多いもの」、「英語説明が多いもの」、「日本語説明と英語説明との間に矛盾が存在するもの」、「英語説明に文法的な誤りが存在するもの」に分類することにより、松本城、姫路城、彦根城、犬山城の英語案内板に検討を加えた。

本発表では、一般的な城郭に見られるものに限定し、例えば、「天守（閣）」、「狭間（さま[ざま]）、「石落し」、「本丸」などが、現地の案内板でどのように表記されているかについて、文部科学省により国宝に指定されている天守を有する4城の他、重要文化財に指定されている現存天守を有する城郭の例も含めて、検討を加えた。

政府が海外からの観光客誘致を積極的に望んでいる現在、国宝や重要文化財に、ユニバーサルラングウイッジと言える英語による説明を入れるべきである。特に城郭の場合、特徴的な「狭間」や「石落し」などの英語説明を入れるべきである。そして同一城郭内で用語は統一すべきである。そのためには、当局が責任をもって日本人とネイティブスピーカーを選別し、互いに連携させる必要がることを強調した。

上記2稿、また、本発表についても、ネイティブチェックはDavid Martin氏にお願いした。

現在完了形の指導法

塚本 睦子

現在完了形は現行の学習指導要領では中学校3年生で初めて学習する。「have/has+過去分詞」は経験、継続、完了と３つの異なる意味を持っているので、理解が容易ではない。平成24年度から使用される中学校英語検定教科書6社を比較すると、導入を継続用法から始めている出版社は4社、完了用法が2社である。初期の英語学習者にとっては、継続用法の方が「ちょうど～したところだ」という完了の用法よりも分かりやすいと思われる。また、指導している大学生136名に現在完了形を使用する和文英訳６問を課したところ、「have/has+過去分詞」の形が正しく書けている割合は約30％に過ぎず、現在完了形の定着率は低い。但し、「ニューヨークに行ったことがありますか」という設問の正答率は70.6%で、Have you ever been to －？ を記憶している為だと思われる。コミュニケーション重視に傾き過ぎて、I haven’t finish homework.で良しとせず、口頭練習を書く活動と結び付けて指導すべきであると考える。

小学校「外国語活動」の目標と学習内容

服部　孝彦

平成20年3月28日に文部科学省から新小学校学習指導要領が告示され、平成23年４月より全国全ての小学校5、6年生に週1時間、年間35時間、「外国語活動」が必修化された。新小学校学習指導要領「外国語活動」には「外国語活動においては英語を取り扱うことを原則とする」と明記されていることから、実質的には今年の４月より全国全ての小学校で英語教育が行われていることになる。本研究発表では、新小学校学習指導要領における外国語活動の目標と内容、小学校英語教育に必要なコミュニケーション能力の考え方について論じた。

「外国語活動」の目標は、(1) 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める、(2) 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る、(3) 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる、の３つの項目で構成されている。この3つのなかで(1)と(3)は言語と文化に関する項目、(2)はコミュニケーションに関する項目である。

中学校以降の英語教育ではコミュニケーション能力のなかの文法的能力の育成を中心とした授業が展開されているのが現実である。そのため語彙、文法を重視し、コミュニケーション能力における方略的能力の育成が不十分である。小学校外国語活動ではコミュニケーションを優先することから方略的能力の育成が期待されているといえる。

コンピュータ用語の一考察：iPod touchとReaderを中心として

高橋　信弘

本発表はReaderとiPod touchを中心に「“tap”の用語は既存の語に意味の変化を加えて、コンピュータの機能の動作を表す語彙の表現として新語を形成している」との仮説を立てて、コンピュータの取扱説明書 、商品パンフレット、アンケート調査の分析した結果や考察から下記の点が明らかになったことを発表した。

1. 2005年版の取扱説明書Reader にはコンピューターの用語“tap”の出現はゼロ、iPod touch取扱説明書は“tap”35回。一方、2011年版の取扱説明書“tap”はReader 93回、iPod touch 95回と出現した。“tap”は“Click”の意味に相当する新語を形成している。
2. 218名のアンケート調査から新用語“tap”の意味「軽くたたく」78人の回答、“Click”"に98人の回答と大きな差がないのは、新用語が認知されて一般化へと普及する傾向にある。
3. Apple, LG, Soft Bankのパンフレットには「タップ」の新用語は一般用語の傾向になっている。

英語教育における効果的 Blended Learning

淺間　正通

教育効率を高める目的から、昨今、e-learnig (electronic learning)もしくはm-learnig (mobile learning)を従来のface-to-face型対面授業に組み込んだ、いわゆるブレンディッドラーニング (blended learning) によるアプローチが教育現場で頻繁に採用されるようになってきた。自律学習をも促すのに大いに貢献するとされるこの教育アプローチではあるが、「自律学習の定着」を見据えた科学的検証を行った関連研究論文は未だ少ない。その背景には、さまざまなパラメーターが関わるゆえの因子特定に難を要する点が挙げられよう。そこで、本発表では、本質的効果を達成し得るブレンディッドラーニングのあるべき姿を、他大学での実践例を参考素材としながら、デジタル教材（デジタルメディア）とアナログ教材（紙媒体）の相互補完によるシナジー効果について検証した。

音読と比較したディクテーションの効果

大橋　由紀子

本研究では、ディクテーション訓練を行う中で、なぜディクテーションは効果があるのかを調査した。学習者の動機がどのように変化し、語彙力はどう影響を受け、リスニング力にどの程度相関があるのかを検証し、発表を行った。筆者（2010）の研究では、ディクテーション方法によって得点の伸びに差が出たことから、引き続き、全文ディクテーションは音読クラスよりも伸びると仮定し、なぜ伸びるのかを調査した。両グループに実施した動機アンケート、及び「理解度」「達成度」に関するアンケート結果から、動機づけに変化は見られなかったが、両グループ間でアンケート項目に対する回答に大きな違いがあると分かった。ディクテーション訓練を行うことにより、学習者は「単語のつながりがわかる」「何がききとれないのだかかがわかる」ようになり、語彙力に影響を与えると考えられる。発表では、上記内容について報告を行った。

英語要約ストラテジーによるリーディング力の向上

香取 真理

本研究の目的は、英語リーディング力の高い被験者にみられる要約プロセスの特徴を、実際の授業に応用し、その効果を探る事である。これまでの研究結果から、英語リーディング力の高い被験者は英語の文章を要約する際に「構文的変形」や「言い換え」等、多様なストラテジーを使用する事が分かった。今回は1セメスター約15回のリーディング授業に、要約タスクを取り入れ、多様な要約ストラテジーを使用する様指導した。ばらつきに差異のない大学生、３つのグループを被験者とし、成績上位群・下位群・統制群の間で、実験後、統計的な差が視られるかどうか検証を行った。授業の中では、毎回被験者に400語程度の文章を要約させ、フィードバックを行った。その後、統計的手法により分析したところ、下位群のグループに実験後大きな変化が視られた。

契約範囲の拡大に対する契約書上のリスク保全について

合田　房生

企業の国際化進展に伴い、ビジネス・ニーズも多様化の一途を辿っており、企業も業態の変化を迫られている。契約の場面でも、従来の機器売買契約から建設工事に見られるEPC（Engineering, Procurement and Construction）契約のような設計～調達～建設に至るValue chainを囲い込む契約形態が主流になりつつある。顧客の「業者に一括で任せたい」というニーズ自体は今も昔も不変であるが、契約を請負うメーカー観点からするとValue Chainの範囲が広くなるに伴い、リスクも同じく拡大することになる。リスク軽減の為の文言の推敲が重要であることは言うに及ばずだが、厳格過ぎると交渉は纏らない。契約の目標や成果（“Spirit of the deal”と言えるもの）を見据え、何を確保し、何を譲歩してもよいかの判断をする為の実務知識と、その判断を契約文言に変換するビジネス言語能力の両方に通暁することが肝要であることを論じた。

インコタームズ 2010 における用語の解釈

大島　英雄

インコタームズ（Incoterms）とは International Commercial Terms を略したもので、国際商業会議所（ICC, International Chamber of Commerce）が制定している貿易条件（Trade terms）の解釈に関する国際規則であり、売買契約における物品引き渡しの場所、危険の移転（危険負担の分岐点）費用の分担などについて当事者（売手と買手）の義務を定めている（代金の支払い方法や物品の所有権の移転の時期については、定めていない）。2011年1月1日よりインコタームズ2010は発効され、今迄の13の trade terms を11の trade terms に集約し、また４ Groups 構成を 2 Classes 構成とした。インコタームズ 2010 ではインコタームズ 2000 での Group D（持込渡し）の5つの貿易条件（DAF, DES, DEQ, DDU, DDP）の内 DDP だけを 残し、後の4つは新たに DAT, DAP に集約された。従来のDAF, DES, DEQ, DDU は廃止となった。

今回はインコタームズ 2010 の改定ポイント、構成、新たな trade terms の DAT 及び DAP の説明、売主・買主の義務、危険の分岐点、及びウイーン売買条約（CISG）との関係について発表する。尚インコタームズ 2010 を国際取引英文契約書にどのように明記したらよいか等についても説明した。

コロケーション・ワークブックの質的分析

小屋　多恵子

本発表では、8つのコロケーション・ワークブックに掲載されているコロケーションの種類を分析し、今後作成すべき効果的なワークブックを提案した。ワークブックの分析により、掲載されているコロケーションは、基本的な内容語から構成される lexical collocations が多いため、学習初期段階でもコロケーションの形で学習が可能であるが、8つのワークブックに共通して掲載されているコロケーションは非常に少なく、扱われているコロケーションも weak collocations から strong collocations まで様々であり、使用するワークブックよって習得できるコロケーションが異なるという欠点が見られた。そこで、ワークブックが対象とする学習者のレベルや目的を明確にした上で、高等学校までに学習すべき基本語彙からなるコロケーションは省き、コーパスから厳選された medium-strong collocations をターゲットとして、1つの node に対して複数の collocates を機能的に提示することなどを主張した。

科学英語論文の構成パターン

大本　道央

英国の *Nature* などの科学雑誌に掲載される論文の本文は主に要約、はしがき、結果、結論からなる。そして、そのそれぞれには固有の書き方があり、内容を構成する固有の要素がある。一見、それぞれが独立しているように見えるが、実際は、要約の内容と重複しないようにはしがきを書いたり、はしがきに示された内容や展開を受けるように結果を書いたり、要約やはしがき、結果の内容をまとめるように結論を書くというように、要約、はしがき、結果、結論は相互に関連し、互いの内容に影響し合っている。発表では、要約、はしがき、結果、結論という論文を構成する主な要素に書かれる各内容が、どのように他の内容やその展開に影響しているか見るために、実際の論文の内容構成パターンを分析・分類し、どのような構成パターンがどのような内容の論文に適しているか検討した。本研究が、多様な論文構成パターンの存在を認識するとともにそれらを理解し、ひいてはそれらの中でどのパターンを執筆する論文に用いるたらよいか判断する一助になるものと確信する。

第175回研究会（2011年5月21日）

シングルセンテンスからディスコースに：プラグマティックスの有効性

遠藤　和文

1990年初頭より、文部科学省はコミュニュカティーブ・コンピタンスの育成を外国語教育の根本に据えて、指導要領を作成し、英語教育もそれに添い、ジェネラル・リングイスティック・コンピタンスのみならず社会。言語能力、ストラティジック・コンピタンスをも含めてバランスのとれたコミュニケーション能力の育成に主眼を置いて進んでいる。発表者は社会言語能力を EFL のコンテクストで、しかも高等学校段階でどのように育成すべきかを模索してきたが、2015年に導入させる新学習指導要領が、社会言語能力のなかでもプラグマティックの要素が色濃く投影されている事に気づいた。故に私は既年度に学習者が使用した文部科学省認定の英語ライティングの教科書が豊富なスピーチ・アクトを取り入れていることに注目し、「感謝」「謝罪」「招待」などの場面で「ソシアル・ポジション」、「クロウスネス・インポジション」が異なる場面を設定し、学習者にディスコース・コンプリーション・タスク、DCT に取り組ませでみると当初は最も基本的なシングル・センテンスで自分の気持ちを表現するに留まった彼らの表現が、まとまったディスコースに発展していくことが確認できた。また DCT で表現できた内容が、１～２ヶ月後に従事させた口頭での表現活動でも、ほぼディスコースとして成立していることが認められた。

必須貿易通信用語

秋山　武清

先行研究のうち松本リスト（1982）、長野リスト（1993）、染谷リスト（1999）の、それぞれの上位頻度1,000 語のうち二つ以上のリストに現れる語をまず選び、次に一つのリストにしか出てこなくても必要と思われるものを追加し、さらに貿易ビジネスを促進遂行するために最低限必要と思われる専門語句を加えて、私のリスト（1,019 語）を作成した。これに門田リスト（1972, 1974）の独特の頻度指標を加えることによって使い勝手の良い語彙リストとした。門田リストは十の位の数でビジネス英語の頻度を示し、一の位の数で普通英語の頻度を示しており、二桁の組数によって相互の関係を示すアイディアである。日本人が国際語としての英語を用いて言語活動するときに最低限の語彙を整理しておくと便利であろうという視点による必須貿易通信用語の提示である。語彙が豊富なことに越したことはないが、まず最低限の語彙を獲得してから、次のステップに進むのが得策である。

第174回研究会（2011年１月22日）

Routine Message の
コミュニケーション技法

青柳　由紀江

日常的に送受信されるビジネス・メッセージ、Routine Messageでは、「効率性」が優先される。本研究では、発信者と受信者双方の効率性を促進できる、Routine Messageのコミュニケーション技法の基本と実践例を提示した。

Routine Messageとして、「問い合わせ」・「依頼」とその「応答」、「報告・通知」、「確認」を取り上げ、発信者がメッセージを迅速に作成でき、また受信者が内容を一読で容易に把握できるコミュニケーション技法の基本として、メッセージの「書き出しの表現」と「構成方法」に着目し、それぞれを例示した。さらに技法の実践例では、受信者としてのメッセージの主旨把握演習と、発信者としてのメッセージの英文編集演習を中心とした、Direct Approach採用のための指導方法と、学生のメッセージ案を紹介した。

英国大学生の Standard English
についての意識 再調査

森田　　彰

2002年2月と2010年2月にケンブリッジ大学ペンブルック・カレッジ（Pembroke College）の全学生およびフェローを対象に行った、同一の標準英語（Standard English）についての意識調査（アンケート）の結果を経年的にも比較しながら、英国の高度な教育を受けた人々が、どのように英語とその変種を捉えているか、また、標準英語を支える要素について考察した。標準英語とそのあり方に関する研究は、単にそれらと、変種、非標準の関係を記述し考察するだけではなく、それら標準、非標準と common mistake や、完全な「誤用（errors)」との関係を考える事になる。これは、非英語母語話者の英語使用の中の許容できる範囲の「誤用」と、正すべき、あるいは全くの「誤用」とを考える事につながり、英語教育にも資するものである事も指摘した。2002年のアンケート結果は、『論叢』10号に掲載してある。

第35回年次大会（2010年９月18日、19日）

英語学習者のためのコロケーション・ワークブックの現状と改善点

小屋　多恵子

本研究は、コロケーション学習のために出版されている国内外のワークブックを比較・分析し、日本人英語学習者にとっての効果的なワークブックを考察することを目的とした。 分析結果から、次の３つの改善点を提案した。１つ目は、語彙的コロケーションの中から学習段階ごとに習得すべきコロケーションを決定することである。これには、 英語母語話者のコーパスと日本人英語学習者コーパスの両方を利用する必要がある。2つ目は、１日20～40位のコロケーションを学習し、全体的には比較的短期間（1-2カ月半）で1冊終えることができる分量にし、繰り返し学習することが重要である点を一言書き添えることである。3つ目は、学習者の段階に即した効果的な構成にすることである。学習者のコロケーション習得のメカニズムをもとに、コンテキストを利用した多岐にわたる問題を提供し、コロケーション自体の難易度や重要度に考慮すべきである。

中高英語教科書語彙から見た大学入試問題語彙の難易度

長谷川修治、中條清美、西垣知佳子

近年、大学入試の英語問題は「受験英語」的イメージから脱却したとの指摘もあるが、「語彙」は中高英語教科書との差が大きく、受験生の負担になると言われる。そこで本研究は、(a)センター試験と(b)個別大学入試の英語筆記問題で使用される「語彙」について、1980年代、1990年代、2000年代の３年代にわたる時代的な変化を定量的に調査した。結果から、(1) (a)と(b)ともに「延べ語数」と「異語数」は増加傾向にあり、(2) 教科書語彙でカバー可能な語の割合は(a)の2009年と(b)の３年代全てで95％未満であり、(3) 汎用語彙（BNC）との比較による語彙レベルは(a)は教科書語彙より低く(b)は高かった。さらに個別大学入試の英語語彙は、(4) 教科書語彙と合わせて学習することで、音声英語および文字英語の言語活動に対して実用度が増加し、(5) 汎用語彙（BNC）との比較による特徴語の観察からは2009年の入試で扱われたトピックの多様性がうかがわれた。

英文と日本文の要約過程にみられる特徴とリーディング力

香取　真理

本研究の目的は、日本語母語話者の英文・日本文双方の要約過程にみられる特徴を探り、英文リーディング力との関連を検証することである。被験者は、過去2年以内 TOEIC SPを受験した事がある10代後半から40代までの日本語母語話者20名である。被験者には英文と日本文それぞれの文章を、英文は英語で、日本文は日本語で要約をしてもらった。今回は、被験者の要約ストラテジーにみられる特徴を6種類（1.短縮 2.結合 3.構文的変形 4.言い換え 5.一般化と具体化 6.抽出文並べ替え）に分類し、TOEICリーディングサブスコアとの関係を検証した。統計的手法により分析したところ、①リーディングスコアと英文要約ストラテジー、②リーディングスコアと日本文要約ストラテジー、③リーディングスコアと英文要約ストラテジー・日本文要約ストラテジーの間には、それぞれ相関があることが分かった。

ディクテーションがTOEICスコアに与える効果

渡辺　由紀子

本研究は、TOEICリスニング指導法についての具体的方策、留意点を提言した。リスニング力を促進する効果の説明変数として、先行研究で取り上げられているディクテーションを採用し、量の異なる２グループにわけ、ディクテーションがTOEIC得点にどのように影響を与えるかを検証した。リスニングは、ディクテーション方法と時間の主効果はそれぞれ有意な値を示し（F(1,80)=15.48; F(1, 80)=105.41, p<.001），有意な交互作用が見られた（F(1, 80)=6.02, p<.05）。part4のみの得点を分析後、２グループ間で有意な差はみられなかったが、量の多いディクテーション訓練は、より点数を上げる効果を持つことが示唆された。リーディングの両グループ間の得点分析では、主効果はみられたが、両グループ間で、その得点の上昇に差は見られなかった。結果、ディクテーション訓練は、リスニング、リーディングともに有効だが、どの量が適切かは特定できない。語彙力等、他の変数がどう得点に影響するのかが今後の課題となった。

コンピュータ用語にみられる同義語

高橋　信弘

本発表ではPC商品カタログの中で出現したコンピュータ用語 みられる同義語の実態調査・分析から省略形（略語）、同義語のカナ表記、コンピュータ用語にみられる同義語の意味ズレの問題点を明らかにする。 実態調査・分析の結果から下記の点が明らかになった。

１．省略形（略語）

製品の性能や機能の進歩による省略形の変化⇒FD(floppy disk)→CD(compact disk)→DVD (digital video disc)→BD(Blu-ray disc)

２．カナ表記

(1) Personal computerの同義語「パソナル・コンピュータ」が「パソコン」省略語が一般化して定着している。

(2) disk/discカナ表記の場合⇒英語の発音が「ディスク」のため、磁気ディスクと光磁気ディスクの区別しにくい。

(3) Personal computerの同義語「「パソナル・コンピュータ」のカナ表記が特定の場所のみ使用以外PC商品カタログに出現しない。

３．同義語は文章の中では、場面的機能、文脈的機能の条件で意味ズレが発生する。例えば、「取り付ける」の意味でカナ表記「インストール」/　「セットアップ」はコンピュータ用語では意味が異なる。

日米企業におけるアニュアルレポートの比較

神谷　明美

米国企業においては、従来からアニュアルレポート（年次事業報告書）は企業の実態を人々に伝える有用な媒体と考えられているが、日本企業においても、近年アニュアルレポートが日本文・英文ともに多く作成されるようになってきた。しかしながら、日米双方のアニュアルレポートは、報告書の体裁などにはそれほど相違がみられないものの、文章表現などには違いもみられる。その違いについて、今回、日米の大手企業各々24社のアニュアルレポート（英文）における「経営者から株主へのメッセージ」に該当する章を取り上げ、“we”と“I”の使用頻度、感謝の意を表す語句の使用頻度などで検証した。日本企業では“we”、“I”とも米国企業より使用頻度が少なく、また冒頭に株主への感謝を述べるケースがあるなど日本語からの直訳が多いことを示唆する結果となった。日本企業は文体や内容構成その他にさらなる工夫を凝らす余地があると考えられる。

生活環境と職場環境が英語学習に 与える影響：日比の比較

中原　功一朗

2009年に、関東学院大学経済学部の１年生を対象として、日常生活における英語との係わり合い、英語を学ぶ動機についての調査を行った。また、フィリピン・マニラ近郊においても大学生52名を対象として同様の調査を依頼した。英語を学ぶ動機については、Gardner (1985)の道具的志向と統合的志向の項目を参照しながら、質問項目を作成した。両志向の指数（高→低）は、ほぼすべての項目において、フィリピン人学生、本学上級英語履修者、本学中級英語履修者、本学初級英語履修者の順であった。また、英語との係りは、フィリピンの学生の方が大差をもって大きかった。日比における社会・言語事情の違いを勘案すると、上記の結果は予想どおりと言える。ただ、動機に 関する項目間の相対的重要度は、すべてのグループにおいて、ほぼ同じであったことが、本研究における興味深い発見と言える。

英語学習への関心と動機： 日本の高校生と大学生の自己学習の差異

佐竹　麻衣

英語学習への関心と動機を知るために、自己学習についてのアンケートとインタビューによる調査を実施した。学習のきっかけやそれを支える動機付けを中心に、高校生と大学生（２００人）に調査を行うことで、両者の差異や大学入試との関係についても考察した。調査の結果、自己学習の実施率は高校３年生が最も高く、また「リスニング・会話に関わる学習」と「読解・文法に関わる学習」とに分類すると、高校３年以外の学年でほぼ等分に分類された。さらにきっかけは学校の授業との関連はほとんどなく、個人的な状況や環境に関わっており、学習は経験から生じた肯定的な姿勢に支えられていた。また高校・大学ともに「文法」よりも「会話」に関心を持つ傾向があり、約８０％の学生が英語学習を肯定的に捉えていることが分かった。しかし一方で、自己学習の割合は低いため、学習意欲を育てる、学生の関心を生かした授業への工夫が必要である。

時を表す副詞 yet 「まだ」と「もう」

塚本　睦子

時を表す yet は日本語では「もう」と訳されたり、「まだ」と訳される。yet は「ある時点で達成されているのは当然である」という感情を喚起するので、疑問文（現時点では「もう」当然達成していますね？）と否定文（現時点で達成されていて当然なのに「まだ」達成されていない）となる。yet は、起こることが期待、あるいは予測されることがまだ起こっていないことを表すので、否定文、疑問文に典型的に現れる。同じ理由で、肯定文でも未来のことを表す文に現れる。本発表では否定文、疑問文、肯定文で使われる用例をあげ、中学校、高等学校の検定教科書を材料にして、英語教育の中ではどのように扱われているか調査を行った。その結果、中学校３年生で学習する現在完了形とともに初出であることが多く、肯定文に現れるyetは扱われないことが分かった。また、日本語の「もう」と「まだ」は多義語で、yet/already, yet/stillなどと呼応しないものが多くみられる。

動詞 help および help with の
目的語の容認性

江連　敏和

本発表においては、動詞helpの直接目的語にどのようなものがくるのか複数の corpus を用いて頻度を分析し、その中でも、一般的に誤用とされる語義が「～を支援する」という場合にどの程度用いられているのか調べ容認性を分析した。Corpus は主に sketch engine の中で使用できるものを用いた。結果として、今後の課題として、第一に、語義が「～の役に立つ、有用である」という場合との区別が明確につくのか、という点を論じること、第二に、corpus のデータであっても web as corpus では、単なる「見出し」や固有名詞もデータとして拾ってしまう点に留意すること、が挙げられた。この点を特に意識してデータの精度を高め今後の研究に生かすつもりである。また、アンケートを行い、実際の教員がどう考えているかという観点からの分析を追加することつもりである。

携帯電話を活用した英語指導法とその効果

下山　幸成

本研究では、大学生を対象とした英語授業で、携帯電話を用いた指導法を紹介するとともに、携帯電話活用前と活用後で、学習者の学習時間、学習ストラテジー、動機づけにどのような変化が起こったかを量的・質的に分析し、その結果を論じた。まず、学生の携帯電話利用の特徴をつかむために行った事前アンケートの調査結果を報告した。次に、４大学７科目における実践例を、携帯電話の画面を画像で紹介しながら配信内容・配信方法・効果の点で授業ごとに報告した。まとめとして、発表者が行った携帯電話利用の指導は学習時間の増大、成績の向上など量的・質的分析のどちらでも有効であったと論じた。また、携帯電話を利用する指導の場合には、学習者に携帯電話を利用するメリットが伝わっていること、配信内容が携帯電話での学習に適していることが条件であり、音声に関しては iPod など音声専用の機器を好むものが多くいることを報告した。

発音記号指導の現状

植田　麻実

英語の発音記号を読み解ければ、未知の単語と出会った時に発音をイメージすることができ学習者が自律し自ら学ぶ可能性にもつながっていく。

本リサーチでは、大学１年生24人に対し、英語で使われる発音記号のうち、研究者により数の見解に差がある母音を8種類のみ /ieæɑ oʌ uə/、子音は、音声のある無しの違いだけで音を作る口の場所は同じである8ペアー /pb，td，kg ，fv，θð，sz，ʃ ʒ ，t ʃ　dʒ/ に加え、流音 /lr/ と渡り音 /mnŋ/ を20分あまりで説明した。その後、２回クイズを行い、その発音記号を使った単語を読み解けたかを調査した。

結果、発音記号の中でも習得が難しいものは、その記号にアルファベットを使っていない /ʒ/，/t ʃ /，/dʒ/ の音であり、 /v/ の音の/b/との混乱があることがわかった。しかし、一回目よりも二回目の方が全体の正解率があがり、t検定の結果有意な差がみとめられた。発音記号を一度授業で取り上げたことが、学習者のその後の習得に影響を与えたことがわかった。

第173回研究会（2010年5月15日）

Communicating Appreciation: An Analysis of Expressions of Gratitude in Ireland, the U.S., and Japan

Kate Elwood

The forms that expressions of gratitude take may vary from culture to culture, even within varieties of inner-circle English, although at present there has not been much research regarding inter-varietal differences. The presentation focused on expressions of gratitude in Ireland, the U.S., and Japan, based on data obtained through discourse completion tests covering three situations related to 1) a small act of consideration; 2) condolence; and 3) practical assistance.

Responses were categorized according to the three main categories “positive comment”, “emotion”, and “effect”, and differences in both types of strategy and forms employed were observed among the three groups. The greatest differences were between the Japanese responses and the English responses. However, there were additionally significant differences between the responses of the American English speakers and those of the Irish English speakers. The presentation also included an overview of pertinent research regarding the speech act of gratitude as well as introducing some aspects of Irish English.

第172回研究会（2010年1月23日）

隠れ商業英語

秋山　武清

商業英語教育発祥の地として知られている商法講習所（1875）の後身としての一橋大学で商業英語が継子扱いされ、あたかも「そんなものは教えていませんよ」と言わんばかりに、別名で教えられてきた。学説史からすると、商業英語学は商学でもなく英語学でもない学際科目としての先駆けと考えられるのであるが、実際には貿易実務の促進遂行技法として教育研究されることが多かったので、技法よりも理論を一段上と見る学界で軽んぜられることも少なくなかった。

東京商科大学の上田辰之助教授の日本商業英語研究会からの退会（1935）もそのようなことが理由かもしれない。その後、一橋大学の教員の日本商業英語学会（現国際ビジネスコミュニケーション学会）への加入は見られず、一橋大学では「商業英語」という形では教授されず、外国貿易各論（1994年に「インターナショナル・ビジネス」と変更）という名のもとに、いわば隠れ商業英語として教授されざるを得なかったのである。

英語語法：常識の非常識
－若干の例を辞書比較とともに－

長野　格

日本人の多くが常識と考えていると思われる英語用法の中で、必ずしもそうでないのではないかと思われるものとして、以下の３点を考察した：

１．agree with《事》

(I) agree with の目的語は《人》であり、《事》はこないという通念があるかと思われるが、実際は《人》も《事》も伴う。両者の間には意味の違いがある。

２．I speak a little English.

「英語が少し話せる」は speak English a little と広く考えられていると思われるが、I speak a little English.のほうが普通である。

３．headlight / taillight; headlamp / tail lamp

車のライトを中心に、lampとlightの意味の同異およびそれに関連する実際の用法を考察した。

第34回年次大会（2009年9月19日、20日）

ネガティブ・メッセージに関する
コミュニケーション技法

青柳　由紀江

ネガティブ・メッセージに関するコミュニケーション技法を、メッセージの構成法と内容面から考察した。まず、従来関心の高いメッセージの構成における Direct / Indirect の選択と Buffer の使用については、テキスト推奨の技法と実証研究での報告による使用頻度を比較しながら再考した。また、ネガティブ・メッセージの内容として必須の「理由の説明」については、Politeness Strategy の言語行為論（Speech Act Theory）における「適切性条件」を否定するストラテジーを紹介した。更に「Bad News」の提示では、否定語や謝罪の使用においてもテキストと実際との相違を指摘した。そして今回の発表では、特にビジネス英語入門レベルの学生を対象とした授業を想定し、それぞれのコミュニケーション技法の簡略化を試みた。

語用論的能力における社会言語学的
能力測定のためのテスト開発

服部　孝彦

コミュニケーション能力（communicative competence）という概念を最初に示したHymes は communicative competence における sociolinguistic competence の必要性を主張した。Canale and Swain は sociolinguistic competence を sociocultural rules と discourse rules の２つに分けた。Canale and Swain を改訂した Canale は、sociolinguistic competence から discourse competence を分化した。Bachman は pragmatic competence を illocutionary competence と sociolinguistic competence に分けた。本研究発表では、Hymes から Bachmanに 至るまでのコミュニケーション能力について考察し、コミュニケーション能力の全体像を明らかにし、その理論的枠組みの中で社会言語学的能力の位置づけをおこなった。そのうえで、コミュニケーション能力の構成要素である語用論的能力における社会言語学的能力測定のためのテストの開発を試みた。

第二言語習得：英語習得理論と日本手話との架け橋の可能性について

植田　麻実

日本の英語教育においては第二言語習得理論が幅広く取り入れられてきた。今後社会のグローバル化が進むにつれ、その中での言語や文化の多様性への関心も高まっている。国内では「日本手話」という言語を母語としマイノリティとしての文化を受け継いできたろう者の言語学習（書記日本語＝読み書きの日本語）においても第二言語習得理論を応用する可能性が示唆されている。

2008年開校の私立明晴学園では、ろう児たちが昭和８年以来正式には行われてこなかった日本手話で書記日本語や他の学科を学ぶといった試みが成功している。ここではすでに第二言語習得理論が応用されている。

本発表では、１）手話が言語として認知された経緯をStokoeを中心に振り返り、２）手話を母語とする場合の実際に応用可能な第二言語習得理論を提示し、３）明晴学園の例から日本のろう児教育における多様性許容の急務を示唆し、第二言語習得理論と手話との架け橋の可能性について考察をした。

Interactive Activities for ESL Students on the Internet: コミュニケーション・タスク学習効果の比較

高橋　信弘

本研究の目的はインターネットを活用して、ビジネス・ コミュニケーションの習得はコミュニケーション・ ドリルを土台にしてコミュニケーション・タスクを行うことがInter-active Activitiesは促進されて語彙習得に効果がある仮説を明らかにすることであった。ペアーワーク・クラスとグループワーク・クラスに区別して実施した結果、下記の点が明らかになった。

１. 語彙習得の学習効果：
英単語テスト調査比較すると、ペアーワークは８％対してグループワークは約３０％の増あった。

２. コミュニケーションの習得の学習効果：
コミュニケーション・タスクのアンケートの分析からペアーワークよりもグループワークはインフォメーション・ギャップを埋める「意味交渉」が積極的である。

Interactive Activities の感想の分析からグループワークでは協調学習「学びの共同体」という環境が学習効果を引き挙げている原因であることが明らかになった 従って、上記の（１）と（２）の成果から仮説が明らかにされた。

英語コピーライティングにみられる説得法

本橋　朋子

最近では、データベースやインターネットの進歩に伴い、消費者に直接商品情報を提供するダイレクトマーケティングが急増している。その結果、集客や売上に直結するレスポンス広告が増えてきた。レスポンス広告は、広告を見た消費者が、資料や見本請求、商品購入などの反応を示すのを目的としている。そこでは、対象分析の他、商品やサービスの情報を効果的に伝えるコピー作成が重要性となっている。

本発表では、米国のコピーライティングにみられる表現や論理構成の特徴を探った。説得力のあるフレーズを書くには、読み手の記憶に残りやすい工夫をする。そのためには、リズム感のある韻や三項列挙、類音の反復などが有効である。また、誰もが知っているような名言や詩、ことわざや慣用表現も印象に残りやすい。説得力のある論理構成にするには、読み手への心理的なアプローチ（Attention-Interest-Desire-Action）を用いる。

ウイーン売買条約における英語

大島　英雄

ウイーン売買条約は正式名称を国際物品売買契約、略称CISGという。本条約は1980年４月11日ウイーンで成立され、1988年１月１日に発効され、2009年７月1日付けで現在74ヶ国が加入している。日本はようやく2008年7月1日に71番目に加入し、2009年8月1日から発効した。日本の加入により、貿易商社やメーカーが、契約を行う際、ウイーン売買条約による旨を英文契約書に明記する必要がでてきた。今回の研究発表の内容は次の通りであるが、なかなか理解されていない部分もあることを考え、契約を行うための指針としたい：ウイーン売買条約に使われている主なポイントとそれぞれの英語の内容、インコタームズ2000とウイーン売買条約との規定の内容の比較、条約発効後の貿易取引の対応、国際商事仲裁におけるウイーン売買条約の適用、アジアとの貿易取引における条約の適用、条約が適用される契約形、条約適用排除の方法と準拠法規定。

英語教育と異文化理解：Web教材の開発

淺間　正通

学習指導要領外国語編の理念に則って、小中の教育現場では盛んに異文化理解教育のプロジェクトが推進されている。2011年度からは小学校においても5・6年生を対象に英語活動が必修化されることから、小中の英語教育はその使命を強く帯びることとなった。そこで、そういった状況を見越して、昨今多くの Web サイトの活用が奨励されたり、または Web 教材自体が開発されつつある。しかしながら、一連のサイトや教材を探索してみると、意外に欠けている視点が見えてくる。それは「問題解決意識の希薄化」である。従来的な異文化迎合意識がそのまま垣間見えるレイアウトであったりする現状を観察するにつけ、あらためて問題解決学習型の、英語教育とリンクした異文化理解教育用 Web 教材の開発の必要性を痛感した。本研究発表では、イスラム文化の一断面に焦点を当てた、CGI 作成による「誤答」から「正答」へのプロセスの在り方を一方策として提示した。

ビジネスレターにおける Routine Message の構成法

藤本　淳史

ビジネスライティングにおいて、社内外の文書でのコミュニケーションには、Routine Message が使われる。それは、分量が短く、内容が比較的複雑ではなく、Direct な表現を用い、文書内に個人的な感情を含まず、読み手も個人的な感情を喚起することのない文書であるといわれる。この発表の目的は次の二つである。第一に、Routine Message とは、どのようなものか、その定義を明確にすることであり、効果的な Routine Message を作成するにはどのようにすればよいのか、必要な条件とは何か、その特徴と傾向を探ることであった。第二に、 ビジネスレターを書く際、「文書の目的とメッセージに対する、期待される読み手の反応を分析」(Thill & Bovee 2008) をし、それに従って、実際の文書構成を考えることが重要である。そこで、読み手がどのように反応するか予測し、どのような構成で Routine Message を作成すればよいかを、実例を挙げて考察した。

アメリカ人と日本人の Disagreement に関する英語表現の調査

佐藤　亜紀

本研究では、disagreement の表現に関し、主にニューヨーク 在住の日本人とアメリカ人にアンケート方式で調査を行い、回答を比較検証した。結果、アメリカ人の多くが相手の立場の上下に敏感に反応し、目上にはほのめかしや留保等の表現を用いた一方、日本人は、目上の相手にも直接的な反対表現を用いる傾向が出た。又、ほめ言葉などの使用頻度にも両者に大きな差異が見られた。本発表では、アメリカ人の表現や日本人特有の表現を紹介し、彼らのコミュニケーション・ストラテジーについても考察した。相手のフェイスへの配慮や微妙なやりとりが要求される FTA (フェイス侵害行為) 表現は、ノンネイティブには難しいとされるが、本調査でも、英語を業務で使う駐在員など、比較的高い英語力の日本人にも不適切な表現が見られた。自然には習得されないプラグマティックスについて、授業などでも積極的に取り入れ、英語学習者の意識を高めていきたい。

Forrest Gump に見られるアメリカ南部方言

福島　一人

1960年代に時代設定をされた、1994年出版の Winston Groom の小説、*Forrest Gump* 中の Forrest の英語について、アメリカ南部方言ではないとするネイティブスピーカーが存在する。例えば、文教大学元教授長野格氏の友人である Mr. Eric は Forrest の英語について次のような評価を下した。

His speech peculiarities aren't a Southern dialect, but rather similar to the way small children don't speak perfectly. Remember, Forrest Gump was supposed to be mentally retarded.

しかし、彼の英語には、アメリカ南部方言と思われるものが多く見られる。Forrest が "mentally retarded"「知能が遅れている」とされていることに注目する余り、彼の英語のアメリカ南部方言性をまったく否定してしまうネイティブスピーカーがかなり存在するであろうと、Mr. Eric の評価から推測される。

本発表では彼の英語に見られる、藤井健三『アメリカ南部方言の語法』(1984) や豊永彰『アメリカの文学方言』(1998) でアメリカ南部方言の典型とされている例を挙げ、その南部方言性を文法面から実証した。また、1932年出版の Erskine Caldwell の小説、Tobacco Road の会話部分に見られるアメリカ南部方言との比較を試み、出版年代による文法面における差異がほとんど存在しないことを確認した。

さらに、特に、最も南部方言に特徴的な重否定や全人称用法については、Forrest の言葉や、Tobacco Road の会話部分に存在する用例の膨大さから鑑み、その出現環境・形態の明示を試みた。

研　究　発　表　総　覧

《第１回月例会～第１７５回研究発表会》（含年次大会）

題　　　目	発　表　者	発　表　日
簡易好みの英語	中　内　正　利	1975年11月15日
英米艇おける貨客輸送専門用語について	河　合　金三郎	1975年11月15日
音声英語の法則	東　後　勝　明	1975年12月20日
入社試験にみる英語力の諸問題	野　沢　忠　雄	1975年12月20日
実務英語の諸問題	安　田　和　生	1976年１月17日
英語聴解力標準テストについて	松　居　　　司	1976年１月17日
英語受動態の効用について	東　苑　忠　俊	1976年２月21日
高校生の英語語いの定着度	今　浦　栄代喜	1976年２月21日
Some Problems in English	R. Murto	1976年３月13日
一般教育英語の諸問題	亘　理　淑　子	1976年３月13日
Idle Thoughts of an Idle Executive	中　川　政　一	1976年４月17日
Japanese Nonverbal Communicative Signs	石　井　　　敏	1976年４月17日
大学英語テキストにおける注釈について	中　内　正　利	1976年５月15日

題　　　　　目	発　表　者	発　　表　　日
TEFL in Japan: Possible Areas of Cooperation between Japanese and Native English Speaking Teachers	Larry Lau	1976年6月19日
日本の英語－過去と展望－	海江田　　進	1976年7月17日
Translation and Language Learning	酒　巻　晴　行	1976年8月21日
冠詞用法の研究	岩　崎　健　彌	1976年9月18日
Introducing Speech Communication to TEFL in Japan	石　井　　敏	1976年10月16日
英語教科書への注文	河　合　金三郎	1976年10月16日
Run-on Sentences in Present-Day English	金　子　輝　美	1976年10月16日
ソ連の英語	海江田　　進	1976年10月16日
聴解と即解	岩　崎　健　彌	1976年10月17日
伝達動詞について	東　苑　忠　俊	1976年10月17日
実用英語という英語	篠　田　義　明	1976年10月17日
条件の副詞節における will について	森　　恒　雄	1976年10月17日
電信英語の法則	長　野　　格	1976年10月17日
和文英訳の考え方に対する私見	安　田　和　生	1976年10月17日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Technical Writing	W. E. Britton	1976年11月27日
英語の歌と英語教育	栗　原　久　江	1976年12月18日
Personal Problems in Teaching English in Japan	K. MacDonald	1977年１月22日
海外旅行の実用英語	竹　田　正　明	1977年２月19日
“The New Official Guide: “Japan” 編集こぼれ話	野　沢　忠　雄	1977年３月19日
訳読と語法の研究	中　内　正　利	1977年４月16日
電信英語の法則（続）	長　野　　　格	1977年５月21日
実用度から見た医学英語	宮　本　道太郎	1977年６月18日
My Consideration in Writing English	D. W. Griffith	1977年７月16日
英文記者雑感	住　野　喜　正	1977年８月20日
On American Place Names	大　石　五　雄	1977年９月17日
無生物主語序説	今　浦　栄代喜	1977年10月22日
関係詞 which, that, where と動詞 visit, inhabit, reach	金　子　輝　美	1977年10月22日
英語教育と実用英語－リーディング指導の立場より－	菊　池　敏　員	1977年10月22日
大学英語教育の改善提案	海江田　　　進	1977年10月23日

題　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
From Foreign Language Studies to Intercultural Communication Studies	石　井　　　敏	1977年10月23日
英訳用和文技術資料の表現	平　野　　　進	1977年10月23日
旅行英語に関する一考察	野　沢　忘　雄	1977年10月23日
英文株式記事の意味構造についての一考察	横　田　　　勉	1977年10月23日
並列構文における語順について	渡　辺　洋　一	1977年11月19日
牛肉と英語	中　川　政　一	1977年12月17日
テクニカルライティングの基本的な考え方	篠　田　義　明	1978年１月21日
ビジネスウィークと経済英語	藤　村　雄　伍	1978年２月18日
ゴルフと英語	織　家　　　肇	1978年３月18日
港湾の英語	河　合　金三郎	1978年４月15日
関係代名詞　“THAT”の一考察	中　内　正　利	1978年５月20日
ビジネス通訳としての失敗談あれこれ	中　牧　広　光	1978年６月17日
小数につける単位名の単複形共存	安　田　和　生	1978年６月17日
How to learn English as viewed by a “Perspectologist”	松　本　道　弘	1978年７月15日

題　　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
日本語教育を通じて見たわれわれの英語	田　辺　洋　二	1978年８月19日
原子力に学ぶ英語－The Odyssey6 of Uranium－	安　田　和　生	1978年９月16日
外国為替英語の実際	中　村　恭　二	1978年10月21日
地理的事物の英語表現について	野　沢　忠　雄	1978年10月21日
The Step by Step Guide Method for Creative Writing	大　内　　　博	1978年10月21日
ジャーナリズム英語の特徴－文章心理学的分析を通して－	横　田　　　勉	1978年10月22日
新製品紹介の英文について	東　苑　忠　俊	1978年10月22日
Dean Andrewsの講義録より	畑　中　良　夫	1978年10月22日
Decision Making	白　野　伊津夫	1978年10月22日
教養英語の是非	海江田　　　進	1978年10月22日
世界銀行職員に対する語学トレーニング	横　井　　　満	1978年11月18日
A Few Approach to Teaching Practical English Conversation	W.B. White	1978年12月16日
多重放送の実態	八　木　啓　充	1979年１月20日
Business Lettersと簡潔性	中　内　正　利	1979年２月17日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
On Society Column	H. Ferretti	1979年３月17日
生産技術の英語	落　合　信　夫	1979年４月21日
アメリカの語学研修所の現状	篠　田　義　明	1979年５月19日
Effective Writing In English	田　中　祥　弘	1979年６月16日
Teaching of English Pronunciation	松　坂　ヒロシ	1979年７月21日
J.D.Salingerの作品における口語表現の特徴について	金　子　輝　美	1979年８月18日
詩語の Vulgarityと effect ーE.A. Poeの詩の image に関する一考察	小　野　素　子	1979年10月20日
英会話教育に関する一考察	秋　山　武　清	1979年10月20日
英語教育48年ー反省と希望ー	海江田　　進	1979年10月20日
実用英語とその表現機構の成立について	大　塚　賀　弘	1979年10月21日
野球英語の特徴	河　合　金三郎	1979年10月21日
Military Termsと語形成について	田　中　祥　弘	1979年10月21日
コンピューターと英語	榊　原　祐　輔	1979年10月21日
英語教育と運用	篠　田　義　明	1979年11月17日
国際協力と英語	檜　山　旦　昭	1979年12月15日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Journaleseにおける話法	布　施　敏　夫	1980年１月19日
each otherr と one another	水　上　峰　雄	1980年２月16日
Attending an American University: Cultural, Professional, and Rhetorical Problems	D.W. Stevenson	1980年２月16日
インタビューの英語	金　子　節　也	1980年３月15日
商業英語における完了時制について	野　口　博　一	1980年４月19日
海外旅行の英会話用法について	竹　田　正　明	1980年５月17日
Noun Premodifiers Efficiency in Current English	篠　田　義　明	1980年５月17日
明治期の商売人英語	長　野　　　格	1980年６月21日
工作機械の英語	大　武　泰　典	1980年７月19日
My Culture Shock	Caroline Dale	1980年９月20日
実用英語とその表現機構 －Registerをめぐる諸問題－	大　塚　賀　弘	1980年10月18日
現代英語の「語感」について	田　中　祥　弘	1980年10月18日
日本の英語・諸外国の英語	海江田　　　進	1980年10月18日
Niederdeutsch と英語	鈴　木　寛　次	1980年10月19日
On Blurb	渡　辺　洋　一	1980年10月19日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Run-on Sentence の文体効果	金　子　輝　美	1980年10月19日
海外旅行と英会話 －語順について－	竹　田　正　明	1980年10月19日
表現性からみた“ly” 副詞－形容詞	竹　田　正　道	1980年10月19日
アメリカの文化と英語	金　徳　多恵子	1980年11月15日
日本人の言語感と英語教育	栗　原　久　江	1980年12月20日
時と時間を表わす表現	大　崎　正　瑠	1981年１月17日
新教育課程へ向けての英語教育	井　坂　陽一郎	1981年２月21日
Public Speaking and the Japanese Student of English	松　坂　ヒロシ	1981年３月14日
Technical Writing Principles	D.W. Stevenson	1981年４月18日
On Ambiguity	信　　　達　郎	1981年５月16日
時事・経済英語の表現－インフレと不況をめぐって	浦　辺　茂　男	1981年６月20日
理工学分野での図や表の説明文	平　野　　　進	1981年７月18日
翻訳－悪文との闘い	森　　　　　徹	1981年９月26日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Using *Business Week* to Teach English to Business Profes-sionals	鍋　倉　健　悦	1981年10月24日
医学英語に関する若干の考察	宮　本　道太郎	1981年10月24日
Barbara Cartlandの英語と文学の特徴について	カイザー陽子	1981年10月24日
One Aspect of English Intona-tion	東　後　勝　明	1981年10月25日
An Analysis of American Humor	天　田　　　豊	1981年10月25日
外貨資金取引に関する英語	中　村　恭　二	1981年10月25日
English in *the Economist*—with with special reference to reports on Japan	藤　村　雄　伍	1981年11月21日
Nonverbal Communication	小　林　祐　子	1981年12月19日
Thoughと Although の現代用法	豊　田　　　暁	1982年１月16日
実用英語に頻出する無駄な表現－日本人による和文英訳を中心心にして－	篠　田　義　明	1982年２月20日
日英語表現様式の違い－英訳日本文学作品を中心として－	原　岡　笙　子	1982年３月20日
Notional/Function Syllabusに関する考察	五十嵐　純　一 George Farina	1982年４月17日

題　　　　　目	発　表　者	発　表　日
英字新聞教材論	松　浦　　　明	1982年５月15日
「メカトロニクス」とその周辺に関する英語	高　橋　弥一郎	1982年６月19日
工業技術英語に必要な基礎力	岡　本　康　男	1982年７月17日
実用英語と倒置構文（Inversion）	大　塚　賀　弘	1982年９月18日
Public Speaking	森　　　　　徹	1982年10月23日
英語のスペリングに関する一考察	カイザー陽　子	1982年10月23日
商業英語教育に関する一考察	秋　山　武　清	1982年10月24日
英語教育における実用性の意味	村　越　行　雄	1982年10月24日
英語活用辞典における連語の分類	引　地　岳　雄	1982年10月24日
英語からの外来語にみられる諸問題	松　浦　　　明	1982年10月24日
Effective Technical Communication	J.C. Mathes	1982年11月20日
英語諸考察－１年間のアメリカ生活を通して－	持　丸　邦　子	1982年12月18日
Stylistic or Strategic Reasons for the Choice of the Passive	栗　原　久　江	1983年１月22日
On English for Special Purposes	David A. Hough	1983年２月19日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
実用度から見た医学英語 (2)	宮　本　道太郎	1983年3月19日
Where *does* there come from?	水　上　峰　雄	1983年4月16日
RESUME（英文履歴書）の書き方の再考	中　畑　　　繁	1983年5月21日
英文ドキュメンツの現状	大河内　護　之	1983年6月18日
Business English学習上の問題点に関する考察	中　村　守　二	1983年7月16日
戦略的コミュニヶーション	榊　原　祐　輔	1983年9月17日
医学論文“native speaker”に見られる“patient”と“case”の混同	引　地　岳　雄	1983年10月22日
外国語の総合能力テスト開発の問題点	佐　藤　史　郎	1983年10月22日
実用性から見た英作文教授法	金　徳　多恵子	1983年10月22日
英文解釈と Pragmatic Solution	村　越　行　雄	1983年10月23日
高校生のリスニングにおける諸問題	篠　原　勇　次	1983年10月23日
英訳者の役割とその実際	森　　　　　徹	1983年10月23日
商業英語の定義について	秋　山　武　清	1983年10月23日
各種学校での語学教育と企業内教育との連携	中　牧　弘　光	1983年10月23日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
描出話法	鶴　見　精　二	1983年11月19日
英語における“politeness”	田　中　知　英	1983年12月17日
英文研究報告の英文品質管理	平　野　　　進	1984年１月21日
collocaticn による勉強法	森　　　　　徹	1984年３月17日
実用英語の中のマザーグース	藤　野　紀　男	1984年４月21日
聴覚言語と視覚言語－日本語と英語の比較－	松　浦　　　明	1984年５月19日
商社における英会話教育の一例	宮　部　　　克	1984年６月16日
English and Equality	P.B. Murto	1984年７月21日
外資系企業によく出る英語	前　田　昌　吾	1984年９月22日
外国メディアが日本を見る目	金　子　節　也	1984年10月27日
English Broadcasts－how to and what to listen	佐々木　俊　郎	1984年10月27日
広告英語の特徴について	渡　辺　洋　一	1984年10月27日
Canadian English－英米語とのsimilarityと differentia	大　塚　賀　弘	1984年10月28日
医学英語に関する若干の考察(2)	宮　本　道太郎	1984年10月28日
シェイクスピア英語の完了時制について	野　口　博　一	1984年10月28日

題　　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
冠詞の用法と実際	森　　　　徹	1984年10月28日
Readability について	水　上　峰　雄	1984年10月28日
英語の辞書について	池　上　勝　之	1984年12月15日
国際取引英語研究体系について	碓　井　陽　一	1985年１月19日
文間の transition について	安　田　和　生	1985年３月16日
English-Japanese Expressional Equivalent	佐　藤　　章	1985年４月20日
英語俳句の作り方	橋　本　　勇	1985年５月18日
米国大統領経済報告とその英語	藤　村　雄　伍	1985年６月15日
Power Supplyの英語	鈴　木　勝　美	1985年７月20日
Listening Instruction に関する一考察 －Discourse を中心に－	篠　原　勇　次	1985年９月28日
How to improve Listening Comprehension	金　徳　多恵子	1985年９月28日
専門学校における英語教育のあり方	青　柳　由紀江	1985年９月29日
日英ユーモアとその構造	三　浦　義　幸	1985年９月29日
現代イギリス作家の文体をめぐって	木　村　公　一	1985年９月29日

題　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
新聞英語の伝達表現	相　場　和　夫	1985年９月29日
語源学から見た正しい英語と誤った英語	鈴　木　寛　次	1985年11月16日
英語の文化的側面と日本人的発想	五十嵐　純　一	1986年１月18日
シェイクスピアと現代英語	鈴　木　　　洋	1986年３月15日
看護学校の英語	松　浦　　　明	1986年５月17日
機械翻訳の現状および今後の問題点	人　見　憲　司	1986年５月19日
Communications in Performance, Planning and Appraisal	Toshiko Saito Stone	1986年９月27日
英語教授法に関する一考察 －Approach, Method, Tech-nique－	金　徳　多恵子	1986年９月27日
英語の動詞に関する一考察 －Polarity/Modality の意味するもの－	五十嵐　純　一	1986年９月28日
Anybody Can－Teaching English Pronunciat1on－	M.ヘイセリッグ	1986年９月28日
誇張の言語	奥　田　二　弘	1986年９月28日
実務家の立場から見た英語の文体	堂野前　　　進	1986年９月28日
編集業務から見た和訳文の長さの比較	竹　下　光　彦	1986年９月28日

題　　　　　目	発　表　者	発　表　日
英語の「驚く」という表現について	増　田　美智子	1986年11月15日
専門学校に於ける「一般英語」の位置	高　橋　祐　子	1987年１月17日
In Defence of Japanese-English Translation as a Means of Teaching English Composition	中　尾　清　秋	1987年３月15日
チョーサーの比喩表現	藤　本　昌　司	1987年５月16日
Some Problems in Modern Approaches to Language Teaching	ポール・ビソネット	1987年７月18日
イメージアップの表現	奥　田　二　弘	1987年９月26日
To be or Not *to be*: Aspects of *To be* Deletion	小　沢　悦　夫	1987年９月26日
困難な条件下における英語教育	青　柳　有紀子	1987年９月27日
いわゆる「三大実用英語試験」のの二次について	岩　崎　里　子	1987年９月27日
洋雑誌における hyphenationの実用性について	辻　　　陽　一	1987年９月27日
before, until 節中の定形動詞について	福　島　一　人	1987年９月27日
医学英語論文の添削－箇条書きの徹底利用	引　地　岳　雄	1987年９月27日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
TIME の punctuation	山　田　利　一	1987年９月27日
アメリカのビジネスにおける俗語と略語	田　中　隆　治	1987年11月21日
通訳とその周辺	佐　藤　　章	1988年１月16日
英語の誤りについて－*The Daily Yomiuri* を中心に	カイザー　陽子	1988年３月19日
Methodology of Teaching Business Writing to Japanese University Students of English	Charles J. Guyotte	1988年５月21日
英語の感情表現について	田　中　知　英	1988年７月16日
“Kiss her on the cheek”表現の一考察	相　場　和　夫	1988年９月24日
「すずめの涙」の表現	奥　田　二　弘	1988年９月24日
“Does Friendly = Polite－It Depends”	M. Hazelrigg	1988年９月25日
自己表現のための英語教育に関する一考察－マズローの欲求階層説に準拠して－	淺　間　正　通	1988年９月25日
中学・高校の英語から実用的な英語へ	萩　野　博　子	1988年９月25日
Let us と Let’s について－レーガン大統領の一般教書から－	藤　村　雄　伍	1988年９月25日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
直訳か意訳か－実務家の立場から－	堂野前　　進	1988年９月25日
貿易英語と技術英語の二刀流をあやつる Business Personの時代	中　牧　広　光	1988年11月19日
広告英語の英米比較	豊　田　　暁	1989年1 月21日
実用英語とワープロを利用した文例作成	平　野　　進	1989年３月18日
音声英語の側面－最近のイントネーションの研究を中心に－	松　井　智　子	1989年５月20日
Rhetorical Expressions in *Time* and *Newsweek*	信　　達　郎	1989年７月15日
Parenthesis の機能と用法	山　田　利　一	1989年９月16日
「大物」の表現	奥　田　二　弘	1989年９月16日
人間関係作りの実用英語	佐　伯　三麻子	1989年９月17日
Three Languages You Must Know All of Them Are English	田　中　隆　治	1989年９月17日
英作文指導上の問題点－日本語の「る」と「た」の機能と英語のテンス－	カイザー陽　子	1989年９月17日
大学教養課程における英語教育法	渡　辺　章　子	1989年９月17日
Unpassive の意味再考	小　沢　悦　夫	1989年９月17日

題　　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Pragmatics: Some Theory, Some Applications －語用論及びその周辺－	五十嵐　純　一 Bruce M. Wilkerson	1989年11月18日
海外旅行における文法より作法優先の具体例	竹　田　正　明	1990年１月20日
機械翻訳の現状と将来	堂野前　　　進	1990年３月17日
英会話教材における一語文の機能分析	淺　間　正　通	1990年５月19日
商業英語の本質と特質	秋　山　武　清	1990年７月21日
日常英語の体験的学習法についての一考察	田　中　順　一	1990年９月29日
ニュース記事英訳の諸問題	奥　田　二　弘	1990年９月29日
ビジネスマンに有用な英語フレーズ	佐　藤　　　章	1990年９月30日
A Survey of English Education at Colleges in Japan	服　部　孝　彦	1990年９月30日
Annual Report の業績表現について	石　川　高　明	1990年９月30日
A Tool for Analyzing Cross-Cultural Communication and Miscommunication	M. Hazelrigg	1990年９月30日
社会が与える言語への影響	人　見　憲　司	1990年９月30日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
英語教育と実用英語について	五十嵐　純　一	1990年11月17日
チョーサーのユーモアとレトリック	藤　本　昌　司	1991年1月19日
技術英文作成講座の運営（1975-1989）について	平　野　　　進	1991年3月16日
実用英語におけるクリスチャンセン・メソッドの活用法	後　藤　悦　夫	1991年5月18日
The Computer as a Research Tool	佐　藤　孝　一	1991年7月20日
The Effect of Rhetorical Organization on EFL Writers	金　徳　多恵子	1991年9月28日
国際摩擦を招きやすい英語表現	高　崎　栄一郎	1991年9月28日
Differences in Difficulty Perception of Relative Clauses between Japanese Students and American Students	塩　沢　泰　子	1991年9月29日
Journalistic Expressions on Political Campaigns by Leading Stateswomen	田　中　順　一	1991年9月29日
「位置付ける」の表現	奥　田　二　弘	1991年9月29日
形容詞の用法に関する考察―いわゆる「限定用法」について―	安　田　和　生	1991年11月16日
一般英語と医学英語の接点	佐　藤　　　章	1992年1月18日

題　　　　　目	発　表　者	発　表　日
通訳者教育に関する考察	馬　越　恵美子	1992年３月21日
機械翻訳と意味理解	堂野前　　　進	1992年５月16日
英語の中の日本語	高　橋　祐　子	1992年７月18日
イギリス英語と日付の表記	豊　田　　　暁	1992年９月26日
株式市場における「上がる」「下がる」表現の特異性	金　子　輝　美	1992年９月26日
日本人の発想と英語表現	北　川　博　一	1992年９月27日
大学生への英語教育への期待	塩　沢　泰　子	1992年９月27日
英語が苦手な生徒の初歩的な誤り－TEP Testより－	前　田　秀　夫	1992年９月27日
語彙データベースの作成と運用法	佐　藤　孝　一	1992年９月27日
依頼表現における kindly の用法	秋　山　武　清	1992年11月21日
実用英語における問題と目的の記述	高　崎　栄一郎	1993年１月16日
The effective Use of English Verbs in English Magazines	大　本　道　央	1993年３月27日
Modifiers Perform Vital Roles in Organizing Information in English	後　藤　悦　夫	1993年５月15日
E. Caldwell の語法－*Tobacco Road* をもとにして	福　島　一　人	1993年７月17日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Southern English and Southern Things from a Southerner	Susanne Wakeman	1993年９月25日
医学英語：動詞 increase を点検する	引　地　岳　雄	1993年９月25日
英語無くて七癖	佐　藤　　章	1993年９月26日
Hypertext の理論と可能性について	佐　藤　孝　一	1993年９月26日
Perfective and Progressive Aspect in Business English	大　本　道　央	1993年９月26日
比較文体の一方法	大八木　敦　彦	1993年９月26日
法律英語について－英文契約書を中心として－	大　島　英　雄	1994年１月22日
Cultural Awareness in Second Language Teaching	服　部　孝　彦	1994年５月21日
ビジネス英語とESP	秋　山　武　清	1994年９月24日
英語医学論文と英語教師	引　地　岳　雄	1994年９月24日
認識的法助動詞の制約と作用域に関する一考察	黒　滝　真理子	1994年９月25日
英語教育における歌	大八木　敦　彦	1994年９月25日
The Bulletin における hyphen の機能分析	大　賀　信　孝	1994年９月25日

題　　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
科学・工業英語と一般英語の単語レベルにおける比較調査	前　田　秀　夫	1994年９月25日
初学者を対象にした英文ビジネスレターの指導法	大　本　道　央	1994年９月25日
日本人ののパラグラフ感覚	高　崎　栄一郎	1994年９月25日
and の語法について－W. Somerset Maughamの短編“The Pool”を中心として	前　田　竜　一	1994年９月25日
英語コーパス作成の実例と活用法	佐　藤　孝　一	1994年９月25日
Infinitive or -ing	五十嵐　純　一	1995年１月21日
Invisible Chains: Hidden Cultural Barriers for Advanced Learners of English	Joseph P. Shaules	1995年５月20日
基体‘symmetrical’に付着する否定接頭辞の考察	大　塚　賀　弘	1995年９月23日
マルチメディアの現状と語学教育への展望	森　田　　　彰	1995年９月23日
日本人による英語医学論文にみる文化的差異	大　滝　祥　子	1995年９月24日
テクニカル・ライティングにおける丁寧さ	大　本　道　央	1995年９月24日
英語における間接形使用と丁寧さ	服　部　幹　雄	1995年９月24日

題　　　　　目	発　表　者	発　表　日
英語教育における異文化理解教育への時代的要請	淺　間　正　通	1995年９月24日
ビジネス・コミュニケーションにおける Voiceの情報構造と、その選択について	松　倉　信　幸	1995年９月24日
翻訳からみた日本語と英語－単語レベルを中心に－	佐　藤　　　章	1995年９月24日
英語研究情報ツールとしてのインターネット	佐　藤　孝　一	1996年１月20日
英語社会でいかに機能するか－あるESL 教室の実例より－	植　田　麻　実	1996年１月20日
文化的側面から見た前置詞 of の周辺	五十嵐　純　一	1996年５月18日
日本人英語学習者にみられる語用論的丁寧さのストラテジー	服　部　幹　雄	1996年９月22日
『タイム』と『ニューズウィーク』の記事表題にみられる「もじり」について	須　部　宗　生	1996年９月22日
英和訳における「類推」と「連想」の有用性	佐　藤　　　章	1996年９月22日
ビジネスレターにおける効果的なパラグラフ構成法	大　本　道　央	1996年９月22日
英文ビジネスライテイングにおける日本人的発想からの脱却	新　田　　　彬	1996年９月22日

題　　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
コマーシャルジャーゴン再考	秋　山　武　清	1996年９月22日
日英両語における時制の比較	小　屋　多恵子	1996年９月22日
プラグマティクスから見た現在完了の意味	川　﨑　　　清	1996年９月22日
英語教職課程の現状	大八木　敦　彦	1996年９月22日
外国語能力を計る方法	福　岡　悦　子	1996年９月22日
VOA Business Report の内容と英語の特徴	中　畑　　　繁	1996年９月22日
音響関係論文におけるアブストラクトの問題点および論文作成におけるインターネットの利用可能性	藤　野　輝　雄	1996年９月22日
英語教育とインターネット－その可能性を探る－	淺　間　正　通	1996年９月22日
英語教育におけるトーンの役割	本　橋　朋　子	1997年１月18日
直訳で生じる日英表現の誤解について	須　部　宗　生	1997年５月17日
Principle of Team-teaching in EFL Classes in Japan	服　部　孝　彦	1997年９月27日
米誌タイムの英語表現－その慣用句的な表現を中心に－	信　　　達　郎	1997年９月28日
話題別分類による日英表現の分析	中　邑　光　男	1997年９月28日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
異文化理解の試み－大学英語教育への導入法－	田　中　喜代子	1997年９月28日
工業英語の指導法	高　橋　信　弘	1997年９月28日
実務翻訳における翻訳単位の有効性	高　崎　栄一郎	1997年９月28日
Secret Log Exchange: Cooperative Learning	植　田　麻　実	1997年９月28日
プレ・リスニング活動の効果についての考察	荻　野　博　子	1997年９月28日
効果的なビジネスライティング法	大　本　道　央	1997年９月28日
Approaches to English Language Teaching	蓮　池　公　治	1997年９月28日
「行為解説」用法の進行形についいて	川　崎　　　清	1997年９月28日
“POLITENESS”に関する一試論	黒　滝　真理子	1997年９月28日
モティベーションとしてのコミュニケーションギャップ－広告のダブルミーニングを中心に－	長谷川　新　一	1998年１月24日
グローバル人材育成制度－一企業例の紹介－	岩　田　　　浩	1998年５月16日
await と wait for の語法比較	長　野　　　格 秋　山　武　清	1998年９月26日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
アメリカにおけるテクニカルライティングの重要性	石　谷　春　奈	1998年9月26日
融資契約書の英語	西　川　永　幹	1998年9月27日
E-mailと電話で用いる英語の指導法	高　橋　信　弘	1998年9月27日
英語技術論文の書き方指導	新　田　　彬	1998年9月27日
日本語の多義性が英語学習に及ぼす影響	吉　岡　誠　次	1998年9月27日
Trends of the Current ESL Curriculum	福　岡　悦　子	1998年9月27日
大学における ESP教育の事例	松　木　良　助	1998年9月27日
複文、重文の分詞構文への変換プロセスとその前提条件	中　原　功一朗	1998年9月27日
動詞 hitと strike の語法比較	飛　渡　　洋	1998年9月27日
インド英語のすすめ	R.D. Saxena	1998年9月27日
パッケージングにおける商品説明の英語	大　本　道　央	1998年9月27日
Business Correspondence －教科書の内容と実際－	佐　藤　夏　子	1998年9月27日
日本人の英語－コンピュータによる分析	佐　藤　孝　一	1998年9月27日

題　　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
大学生の英語学習に対する意識調査・考察	荻　野　博　子	1998年９月27日
相撲英語の表現の豊かさ	井　上　貞　明	1998年９月27日
英語カナ表記の問題点	藤　田　玲　子	1998年９月27日
R.B. Kaplan 教授講話に触発された問題回顧－Lacuna(e), Pragmatics, Cultural context, Discourse, etc.	五十嵐　純　一	1999年１月23日
コンピュータを利用したビジネス英語研究	中　邑　光　男	1999年１月23日
基本動詞 come と go の特性について	井　上　貞　明	1999年５月15日
英語広告文の研究－その文構造とと文化的背景－	高　橋　常　平	1999年５月15日
Methods of Accreditation and State Licensure	服　部　孝　彦	1999年９月25日
海外の新聞／雑誌の実用的効用	西　川　永　幹	1999年９月25日
「There is＋複数名詞」の構文	宮　崎　路　子	1999年９月26日
季節名と冠詞－コンピュータによる調査－	豊　田　　　暁	1999年９月26日
パンフレットに現れる英語の特徴	大　本　道　央	1999年９月26日

題　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Ｅメールの英文メッセージ構成「Regardin－Please－As」手法の指導効果	高　橋　信　弘	1999年９月26日
英語の語彙習得に見られる多義性の影響について	吉　岡　誠　次	1999年９月26日
語彙力増強用教材に見られるコンテクストとイメージの活用	大　場　智　彦	1999年９月26日
コトバのマネジメントー省略表現の認知言語学的アプローチー	長谷川　新　一	1999年９月26日
Utilizing Logical Propositions for Improving Communication	Robert M. Baxter	1999年９月26日
依頼表現に見られる ‘Thank you’の用法	本　橋　朋　子	1999年９月26日
クリントン証言に見る英語表現	三　浦　義　幸	1999年９月26日
マルチメディア時代の海外における遠隔教育の活用法	佐　藤　夏　子	1999年９月26日
コーパス（corpus）と頻度上位語の関係	前　田　秀　夫	2000年１月22日
なぜ General English（GE）を重視するのか	橋　本　光　憲	2000年５月20日
語用論から観た条件文	川　崎　　　清	2000年９月23日
The Guardian Weekly に現れる compounding の現状	大　賀　信　孝	2000年９月23日

題　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Limitation in the Use and Interpretation of the TOEFL	Robert Baxter	2000年9月24日
インタビュー英語の文体	田　中　健　二	2000年9月24日
英文雑誌の広告コピーで用いられる英語の特徴	大　本　道　央	2000年9月24日
Technical Communication in English の効果的授業方法	藤　野　輝　雄	2000年9月24日
モダリティー表現にみられる語用論的転移現象	黒　滝　真理子	2000年9月24日
コンピュータによる分詞構文への変換プログラム	中　原　功一郎 寺　嶋　　　隆	2000年9月24日
最新米語の変化	井　上　貞　明	2000年9月24日
extremely のコロケーションについて－強調副詞としての意味に注目して－	谷　　　憲　治	2000年9月24日
専門学校生のための通訳技法	柴田バネッサ清美	2000年9月24日
ライティングの授業における Peer Readingの利点と問題点	小　平　昌　子	2000年9月24日
PCメーカーの契約書に頻出する語句	高　橋　信　弘	2000年9月24日

題　　　　　目	発　表　者	発　表　日
発信型の英語力向上のためのスピーチのあり方について－主として“上がり症”の実態とその対策について	近　藤　豊　彦	2000年９月24日
学習者の自律と動機づけ: 学年度最終課題にレポートを取り入れた授業例	植　田　麻　実	2001年１月27日
効果的なコミュニケーションのための Tone	金　徳　多恵子	2001年１月27日
英語表現におせる丁寧度	平　井　通　宏	2001年５月19日
皮肉の言語学と言語学のアイロニー	川　﨑　　清	2001年５月19日
A World Englishes Paradigm for EFL Learners	Jeffrey C. Miller	2001年９月22日
外国為替英語の名詞・動詞・数字表現	長　島　常　光	2001年９月22日
英文契約書に頻出する慣用語句	高　橋　信　弘	2001年９月23日
Business Communicationにおける会計表現	青　柳　由紀江	2001年９月23日
英文ニュース記事における経済統計表現	村　上　直　久	2001年９月23日
ビジネス文書における効果的な Subject Lineと Introduction	大　本　道　央	2001年９月23日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
リーディングの授業における学習者の belief と学習ストラテジー	児　島　千珠代	2001年９月23日
リスニングとスピーキングに応用できる読解指導	川　村　幸　夫	2001年９月23日
歌を教材とした大学用英語テキストの変遷	飛　渡　　　洋	2001年９月23日
スピーチにおける質疑応答の活性化	近　藤　豊　彦	2001年９月23日
日本人学習者の英語コロケーション能力に与える日本語の影響	小　屋　多恵子	2001年９月23日
ライティング授業における文法指導	小　平　昌　子	2001年９月23日
Either, Neither および None を受ける動詞の数	豊　田　　　暁	2001年９月23日
特質と本質－ビジネス英語の研究をめぐって－	秋　山　武　清	2002年１月26日
フォントのもつトーンの役割	本　橋　朋　子	2002年１月26日
「なつかしい」の意味構造	川　﨑　　　清	2002年５月18日
自動車メーカーにおける英語研修例	中　原　功一朗	2002年９月21日
非母国語話者に見られる英文電子メールの諸特徴	河　原　俊　昭 淺　間　正　通	2002年９月21日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
商業英語辞典の効果的な使い方	大　本　道　央	2002年９月22日
「誤用」から「正用」への変貌 ージャーナリズムでの compare と anotherを中心としてー	村　上　直　久	2002年９月22日
経営用語の用例研究	大　島　英　雄	2002年９月22日
旅行英語における日時表記と進行相	竹　田　正　明	2002年９月22日
英語テキストに見られる英語コロケーションの現状	小　屋　多恵子	2002年９月22日
的確な英語表現のための語の選択	小　林　玲　浩	2002年９月22日
使用目的に合った実務英語運用能力の育成	高　橋　信　弘	2002年９月22日
実用英語におけるイントネーションの機能	江　連　敏　和	2002年９月22日
認識的モダリティと文法化現象に関する一考察	黒　滝　真理子	2002年９月22日
英語学習者の自律を促す学習課題	植　田　真　実	2002年９月22日
採用現場からみた実務翻訳者養成の課題	前　川　真　理	2002年９月22日
トピックセンテンスの機能	原　田　慎　一	2002年９月22日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
理工系大学生に対する ESPのあり方－ディスコース・コミュニティーのニーズ分析－	鹿　野　　　緑 新　田　　　彬 大和田　和　治	2003年１月25日
正しい英語と実用英語	森　田　　　彰	2003年１月25日
discourse，　文法，および lacunology	五十嵐　純　一	2003年５月17日
制限的用法の関係詞と先行詞の定冠詞	坂　井　孝　彦	2003年５月17日
Journalistic Writingの記事作法	佐　藤　正　和	2003年９月20日
Probably，likely，possiblyと perhaps，maybeとの違い	村　山　康　雄	2003年９月20日
テクニカル・コミュニケーションにおけるトーンの分析	三　浦　義　幸	2003年９月21日
テクニカル・ビジネス英語上達のための検定試験活用法	大　本　道　央	2003年９月21日
Technical Communication における段落構成	金　徳　多恵子	2003年９月21日
テクニカル・ライティングにおけるキーワード	小　林　玲　浩	2003年９月21日
Academic Writingにおける効果的なアブストラクト	原　田　慎　一	2003年９月21日
Business Correspondence の最新フォーマット	青　柳　由紀江	2003年９月21日

題　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
テクニカル・ビジネスライティングにおける文書スタイル	藤　本　淳　史	2003年９月21日
コロケーションの再定義	小　屋　多恵子	2003年９月21日
ビジネス・コミュニケーションと業界用語	高　橋　信　弘	2003年９月21日
大型辞書編纂の舞台裏	須　部　宗　生	2004年１月24日
所属を表す前置詞 at/of/in について－大学名を中心に－	長　野　　　格 秋　山　武　清 豊　田　　　暁	2004年１月24日
「文学テキスト」から「英語教材」へ－英語リーディング教材序論－	杉　本　香　織	2004年５月15日
Technical Communication Education in Japan	Robert M. Baxter	2004年５月15日
Basic English における root sense の価値再認識	牧　　　雅　夫	2004年９月18日
英米における時刻表記の分析	豊　田　　　暁	2004年９月18日
医療福祉系大学生に求められる英語力	宮　崎　路　子 飛　田　ル　ミ	2004年９月19日
大学生の語彙習得を助長する単語テスト	原　田　慎　一	2004年９月19日
コンピューターを使った発信型英語授業の実践例	小　平　昌　子	2004年９月19日

題　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
コンピューターによる英語学習者の誤答分析	佐　藤　孝　一	2004年9月19日
テクニカルライティングにおける製品の効果的な記述法	大　本　道　央	2004年9月19日
メディア英語－論理構成の実情	江　連　敏　和	2004年9月19日
『TIME』誌にみられるコロケーションの特徴	小　屋　多恵子	2004年9月19日
映画の英語－原作との比較	杉　本　久美子	2004年9月19日
Presentation skills course forcusing on peer evaluations	塩　沢　泰　子 Richard Ascough	2005年1月22日
Alice Walker著 *The Color Purple* の英語	福　島　一　人	2005年1月22日
アメリカの対日イメージ－メディアなどに見られる英語表現	鹿　倉　久　代	2005年5月21日
所有代名詞の用法に影響を与える inalienability の度合い－コーパスに基づく実証的研究－	渡　辺　洋　一	2005年9月24日
「実用英語と表現機構」再考 －アジアの文化の中で－	大　塚　賀　弘	2005年9月24日
E-mail における効果的な Subject Line の作成方法	藤　本　淳　史	2005年9月25日
E-mail で用いられる略語の現状	秋　山　武　清	2005年9月25日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
cliche についての考察	大　賀　信　孝	2005年９月25日
Swearing（誓言）にみられるチョーサーの口語表現	藤　本　昌　司	2005年９月25日
リーディング教材において背景知識が学習者に与える効果	遠　藤　和　文	2005年９月25日
多読が与えるリーディングストラテジーへの影響	長谷川　文　子	2005年９月25日
インターネットによる英語学習の動機づけ	高　橋　信　弘	2005年９月25日
フィリピンで使われる英語の現状と将来	中　原　功一朗	2005年９月25日
Business Correspondence における説得技法	青　柳　由紀江	2005年９月25日
学生によるインプットとグループ・ワークに関するアクションリサーチ	植　田　麻　実	2006年１月14日
Business Writingにおける“politically correct expression”の特徴	本　橋　朋　子	2006年１月14日
定義されたコロケーションとその有用性：「和英辞典的」見地から	福　島　一　人	2006年５月20日
日本人英語学習者の基本コロケーション知識発達のメカニズム	小　屋　多恵子	2006年５月20日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
複数の統合:「a(n)＋形容詞＋数詞＋複数名詞」構造	長　野　　　格	2006年９月23日
高校現場での英語教育: コミュニケーション教育と文法指導	塚　本　睦　子	2006年９月23日
CALL授業における高校生の態度・動機づけ	下　山　幸　成	2006年９月24日
電子辞書が Reading Strategy に及ぼす影響	淺　間　正　通	2006年９月24日
EFL 学習者の「中間言語」分析	佐　藤　孝　一	2006年９月24日
コンラッドの初期小説におけるコロン、セミコロン、ダッシュの用法	秋　葉　敏　夫	2006年９月24日
EGP と ESP のスタイル	江　連　敏　和	2006年９月24日
IT 英語の語彙力増強への動機づけ: リスニングとプレゼンテーションの訓練から	高　橋　信　弘	2006年９月24日
日比における英語の重要性: 職場を中心として	中　原　功一朗	2006年９月24日
ニュージーランド英語について考える: 分詞、前置詞の視点より	大　賀　信　孝	2006年９月24日
Current and Future English in Canada: An Analysis of the Written and the Spoken Form	熊　木　秀　行	2006年９月24日

題　　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Abstract の効果的な書き方	大　本　道　央	2006年９月24日
Japanese on English: A Modest Influence	Robert Spivak	2006年９月24日
物体移動における‘from’と‘to’をめぐって：そうだ京都，行こう	梅　本　　孝	2007年１月27日
地域社会における実用英語	五十嵐　純　一	2007年５月19日
ビジネス英語のパラダイム―動的ESP論―	秋　山　武　清	2007年９月22日
‘big’‘large’‘little’‘small’：対立関係に着目して	福　島　一　人	2007年９月22日
携帯電話を活用した英語指導法とその効果	下　山　幸　成	2007年９月23日
IT用語の体系的な習得法	高　橋　信　弘	2007年９月23日
効果的な英文履歴書の論理構成とスタイル	本　橋　朋　子	2007年９月23日
効果的なビジネス・コミュニケーション	小　郷　次　郎	2007年９月23日
ビジネス・コミュニケーションにおける Direct Approach	青　柳　由紀江	2007年９月23日
実用英語習得のための自律学習支援	服　部　幹　雄	2007年９月23日

題　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Sense of Wonderを使ったグループ学習	植　田　真　実	2007年９月23日
学習者の誤文例が示す文法指導の問題点	大　場　智　彦	2007年９月23日
大学入試センター試験問題と高校英語教科書の語彙分析	谷　　　憲　治 西　堀　雅　明	2007年９月23日
英文契約書作成上の留意点	大　島　英　雄	2007年９月23日
Jude the Obscure におけるコロン、セミコロン、ダッシュ	秋　葉　敏　夫	2007年９月23日
Mind the Gap: 教養英語と実用英語	坂　井　孝　彦	2007年９月23日
TV ニュースを使用した CALL 授業: 実践報告	小　林　ひろみ	2008年１月26日
コーパスに基づく広告英語の語彙・語法研究	渡　辺　洋　一 藤　本　淳　史 原　田　慎　一	2008年１月26日
連鎖関係詞節現状	福　島　一　人	2008年５月17日
韓国と日本の大学生の英語学習動機と学習行動	佐　藤　夏　子	2008年９月20日
Shinglish and its Influences	Robert Spivak 熊　木　秀　行	2008年９月20日
科学技術論文における効果的な英文構成法	大　本　道　央	2008年９月21日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
実用英語における help の語法	江　連　敏　和	2008年９月21日
英文ニュース記事における引用符、コンマ、ピリオドの用例	村　上　直　久	2008年９月21日
実用英語習得におけるカリキュラムの運用	服　部　幹　雄	2008年９月21日
語彙習得に与える意味的プライミング効果	高　橋　信　弘	2008年９月21日
ビジネスコミュニケーションにおける“You-attitude”	青　柳　由紀江	2008年９月21日
図書館を利用した英語授業	山　本　由布子	2008年９月21日
英語と日本語の接続詞の比較: 高校入試問題を中心として	塚　本　睦　子	2008年９月21日
英語学習意欲減退の社会的要因	植　田　麻　美	2008年９月21日
英文契約書に見られる法律用語の用例	大　島　英　雄	2008年９月21日
シンガポール標準英語とシングリッシュの役割	原　田　慎　一	2008年９月21日
by の多様性: イメージスキーマからの考察	梅　本　　　孝	2008年９月21日
英語学習意欲減退の社会的要因	植　田　麻　美	2008年９月21日
オーラルコミュニケーションＩの教科書評価	鈴　木　忠　幸	2009年１月24日

題　　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
英語 e-Learning と FD 活動の現状と課題: 東京理科大学野田校舎を例として	川　村　幸　夫	2009年１月24日
小学校英語の課題と展望	淺　間　正　通	2009年５月16日
ネガティブ・メッセージに関するコミュニケーション技法	青　柳　由紀江	2009年９月19日
語用論的能力における社会言語学的能力測定のためのテスト開発	服　部　孝　彦	2009年９月19日
第二言語習得理論の手話への応用	植　田　麻　実	2009年９月20日
Interactive Activities for ESL Students on the Internet: コミュニケーション・タスク学習効果の比較	高　橋　信　弘	2009年９月20日
英語コピーライティングにみられる説得法	本　橋　朋　子	2009年９月20日
ウィーン売買条約における英語	大　島　英　雄	2009年９月20日
英語教育と異文化理解：Web教材の開発	淺　間　正　通	2009年９月20日
ビジネスレターにおけるRoutine Messageの構成法	藤　本　淳　史	2009年９月20日
アメリカ人と日本人のDisagreementに関する英語表現の調査	佐　藤　亜　紀	2009年９月20日
Forrest Gump に見られるアメリカ南部方言	福　島　一　人	2009年９月20日

題　　　　　目	発　表　者	発　表　日
隠れ商業英語	秋　山　武　清	2010年１月23日
英語語法：常識の非常識 －若干の例を辞書比較とともに－	長　野　　　格	2010年１月23日
Communicating Appreciation: An Analysis of Expressions of Gratitude in Ireland, the U.S., and Japan	Kate Elwood	2010年５月15日
最近の英語研究用コーパスの紹介とその活用法	渡　辺　洋　一	2010年５月15日
英語学習者のためのコロケーション・ワークブックの現状と改善点	小　屋　多恵子	2010年９月18日
中高英語教科書語彙から見た大学入試問題語彙の難易度	長谷川　修　治 中　條　清　美 西　垣　知佳子	2010年９月18日
英文と日本文の要約過程にみられる特徴とリーディング力	香　取　真　理	2010年９月19日
ディクテーションがTOEICスコアに与える効果	渡　辺　由紀子	2010年９月19日
コンピュータ用語にみられる同義語	高　橋　信　弘	2010年９月19日
日米企業におけるアニュアルレポートの比較	神　谷　明　美	2010年９月19日
生活環境と職場環境が英語学習に与える影響：日比の比較	中　原　功一朗	2010年９月19日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
英語学習への関心と動機：日本の高校生と大学生の自己学習の差異	佐　竹　麻　衣	2010年９月19日
時を表す副詞 yet 「まだ」と「もう」	塚　本　睦　子	2010年９月19日
動詞 help および help with の目的語の容認性	江　連　敏　和	2010年９月19日
携帯電話を活用した英語指導法とその効果	下　山　幸　成	2010年９月19日
発音記号指導の現状	植　田　麻　実	2010年９月19日
Routine Messageのコミュニケーション技法	青　柳　由紀江	2011年１月22日
英国大学生の Standard English についての意識 再調査	森　田　　彰	2011年１月22日
シングルセンテンスからディスコースに：プラグマティックスの有効性	遠　藤　和　文	2011年５月21日
必須貿易通信用語	秋　山　武　清	2011年５月21日
中華系シンガポール社会における言語の役割の変容	原　田　慎　一	2011年９月17日
日本の城郭案内板の英語	福　島　一　人	2011年９月17日
中学校における現在完了形の指導法	塚　本　睦　子	2011年９月18日

題　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
小学校外国語活動の目標と学習内容	服　部　孝　彦	2011年９月18日
コンピュータ用語の一考察：iPod touchとReaderを中心として	高　橋　信　弘	2011年９月18日
英語教育における効果的 Blended Learning	淺　間　正　通	2011年９月18日
音読と比較したディクテーションの効果	大　橋　由紀子	2011年９月18日
英語要約ストラテジーによるリーディング力の向上	香　取　真　理	2011年９月18日
契約範囲の拡大に対する契約書上のリスク保全	合　田　房　生	2011年９月18日
インコタームズ2010における用語解釈	大　島　英　雄	2011年９月18日
コロケーション・ワークブックにおける質的分析	小　屋　多恵子	2011年９月18日
科学英語論文における構成パターン	大　本　道　央	2011年９月18日
カントリー音楽の歌詞から読むアメリカ大衆の心情	渡　辺　洋　一	2012年１月21日
12 Evils of Business Email	篠　田　義　明	2012年１月21日
視覚補助を伴うシャドーイングが読解力に及ぼす効果	武　井　　　修	2012年５月19日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
Split Infinitive の検証： 1語による「分離」	中　畑　　　繁	2012年５月19日
Ms, Miss, Mrs, Mrの敬称の実態	渡　辺　洋　一	2012年９月15日
英語定型表現の「定型訳」に求められる改善点：not to say…などを中心に	大　場　智　彦	2012年９月15日
基本コロケーションリスト作成のための一考察	小　屋　多恵子	2012年９月16日
日英語対照によるコロケーションの比較	江　連　敏　和	2012年９月16日
実践的英語運用能力育成を目指した単語集の作成とその活用効果	下　山　幸　成	2012年９月16日
英文アニュアルをもとにしたビジネス英語教育に有用な語彙表の作成	神　谷　明　美	2012年９月16日
タブレット端末の操作に使用する英語	高　橋　信　弘	2012年９月16日
インコタームズ2010とウイーン売買条約の危険移転に関する規定の比較分析研究	大　島　英　雄	2012年９月16日
英訳された刑法における shall の問題点	熊　木　秀　行	2012年９月16日
法廷通訳をめぐる問題点	佐　藤　夏　子	2012年９月16日
英字新聞を使った効果的な授業	植　田　麻　実	2012年９月16日

題　　　　　　　　目	発　表　者	発　表　日
英語論文のDos & Don’ts	大　本　道　央	2012年９月16日
大学英語教育における「ビジネスの英語」の現状	青　柳　由紀江	2012年９月16日
『ビジネス英語』を考える	秋　山　武　清	2013年１月26日
コーパスを利用した類義語研究の方法	渡　辺　洋　一	2013年５月18日
グローバル時代の企業で必要な英語の指導法 ⑵ How are English language skills needed by companies best taught in the global era? Style を中心として	篠　田　義　明	2013年５月18日
グローバル人材育成のためのソフトスキルを活用した英語教育	下　山　幸　成	2013年９月14日
日本人が混同しやすい英語類似表現	大　場　智　彦	2013年９月14日
貿易英語のModel Expression と Vocabulary の効果的な使用例	大　島　英　雄	2013年９月15日
タブレット端末の英文マニュアルで使用される動詞の複合語	高　橋　信　弘	2013年９月15日
英語習熟度別クラスと一般クラスの教育効果	香　取　真　理	2013年９月15日
大学生の英単語学習ストラテジーの実態	佐　藤　夏　子	2013年９月15日

題　　　　　目	発　表　者	発　表　日
米オークションサイトeBay で使用されるビジネス英語の特徴	藤　本　淳　史	2013年９月15日
日米企業のWeb ページ比較	神　谷　明　美	2013年９月15日
Politically Correct における推奨語のコーパス分析	谷　岡　　　亮	2013年９月15日
ESP 教育に適用できる英語科学雑誌コーパス分析	小　屋　多恵子	2013年９月15日
英語定型表現の音声指導	江　連　敏　和	2013年９月15日
日英語のモダリティーとポライトネスの関係	黒　滝　真理子	2013年９月15日
Application Letter の効果的な論理構成	本　橋　朋　子	2013年９月15日
クレーム・メッセージの英文作成技法	青　柳　由紀江	2013年９月15日
最近のモチベーション研究からみた英語学習ストラテジー	植　田　麻　実	2014年１月25日
日本の名所・旧跡に見られる案内板の英語	福　島　一　人	2014年１月25日

RANDOM STUDIES IN ENGLISH

中　内　正　利	
題　目	発　表　日
カトレヤ (Cattleya)	1978年1月21日
“Helpmate”の由来	1978年2月18日
“Starboard”と“Port”	1978年3月18日
動詞“Help”の語法	1978年4月15日
小数の「数」	1978年5月20日
We = Youの語法	1978年6月17日
英語の Comparison	1978年7月15日
「過去二ヶ月」という英語	1978年8月19日
There と Here の考察	1978年9月16日
Atと In の考察	1978年11月18日
実用英語の発音	1978年12月16日
Used to の語法研究	1979年1月20日
Learn と Teachと Studyの意味	1979年3月17日
Out = Out ofの研究	1979年4月21日
文学と英語の学習	1979年5月19日
Here you areの語法	1979年6月16日

題　　　　　　　　　目	発　　表　　日
英語ジョークの考察	1979年７月21日
Blind Spots in EngIish learning	1979年８月18日
World Book Dictionary 1970年版を評す	1979年11月17日
文法のつまずき	1979年12月15日
英語の２語２桁の数字	1980年１月19日
英語発音の有効性	1980年２月16日
“Like”の接続詞的用法	1980年３月15日
「英語と私と」の思い出(1)	1980年４月19日
Business Lettersのあり方	1980年６月21日
主語と述語との照応	1980年７月19日
「英語と私と」の思い出(2)	1980年９月20日
“a friend of mine”の語法	1980年11月15日
“since”の用法	1980年12月20日
トリ年にちなんで	1981年１月17日
「錨」談議	1981年２月21日
代名名詞“I”について	1981年３月14日
数（NUMERAL)の話あれこれ	1981年４月18日

題　　　　　　　目	発　　表　　日
Bush考	1981年５月16日
Eitherの用法	1981年６月20日
Pronunciation 余談	1981年７月18日
Because と For	1981年９月26日
訳と実物	1981年11月21日
Here is について	1981年12月19日
英語は易しい	1982年１月16日
英語と Tone	1982年２月20日
Bread あれこれ	1982年３月20日
U-turnその他	1982年４月17日
英文の構成	1982年５月15日
For + Acc. + to-infinitiveについて	1982年６月19日
アメリカ通貨の英語（その１）	1982年７月17日
アメリカ通貨の英語（その２）	1982年９月18日
筋ちがいの英語	1982年11月20日
Thanksgivingその他	1982年12月18日
関係代名詞について	1983年１月22日

題　　　　　　　　目	発　　表　　日
古び行く英語表現	1983年２月19日
「左舷」について	1983年３月19日
新聞英語とは	1983年４月16日
帯に短し	1983年５月21日
文法＆慣用	1983年６月18日
勘違いの借用英語	1983年７月16日
「不燃性」その他	1983年９月17日
本との出会い（その１）	1983年11月９日
本との出会い（その２）	1983年12月17日
長鞭不及馬腹	1984年１月21日
アクセントの話	1984年５月19日
日本人の誤りやすい発音	1984年６月16日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　　表　　日
辞書の周辺	水　上　峰　雄	1984年12月15日
前置詞の効果的な指導法その(1)	篠　田　義　明	1985年１月19日
開国期の Pidgin Japanese	長　野　　　格	1985年３月16日
実用英語における文法範疇と表現範疇について	大　塚　賀　弘	1985年４月20日
前置詞の効果的な指導法その(2)	篠　田　義　明	1985年５月18日
On "go shopping"	水　上　峰　雄	1985年６月15日
ビジネス英語における「時」の表現について	長　野　　　格	1985年７月20日
同格の that とその用法の限界	大　塚　賀　弘	1985年11月16日
The Effective Use of Logical Connectives	篠　田　義　明	1986年　1月18日
語法とクイズ	水　上　蜂　雄	1986年　3月15日
ビジネス英語文献比較(1) －DATE, SALUTATION, COMPLI-MENTARY CLOSE について－	長　野　　　格	1986年　5月17日
「動詞十it that 構文」をめぐる問題	大　塚　賀　弘	1986年　7月19日
ビジネス英語文献比較(2) －Inquiry について－	長　野　　　格	1986年11月15日
What is Logical English	篠　田　義　明	1987年１月17日

題　　　　　　目	発　表　者	発　　表　　日
アメリカ英語の方言	水　上　峰　雄	1987年３月15日
文体をめぐる諸問題	大　塚　賀　弘	1987年５月16日
Which Words Should We Use?	篠　田　義　明	1987年７月18日
Cultural Literacy について －英語と文化背景的知識－	渡　辺　洋　一	1987年７月18日
Eliminating '-ing' from the Gerund	篠　田　義　明	1988年１月16日
Learning to Write English with System and Method	Chaster Proshan	1988年３月19日
ビジネス英語文献比較 －Enclose について－	長　野　　　格	1988年５月21日
Cultural Mode in Language & Thought	大　塚　賀　弘	1988年７月16日
Itの用法とその変遷	鈴　木　寛　次	1988年11月19日
The Use of Euphemism	篠　田　義　明	1989年１月21日
ビジネス英語文献比較(4) －返信依頼表現について－	長　野　　　格	1989年３月18日
米国方言に対する米国民の知覚と態度について	渡　辺　洋　一	1989年５月20日
Margaret M. Bryantの *Current American Usage* 再考(1) －名詞を中心に－	大　塚　賀　弘	1989年７月15日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　　表　　日
古への詞は多く田舎に残れり －英語変化の諸相の一側面－	鈴　木　寛　次	1989年11月18日
The Importance of Definition －How to Define a Word	篠　田　義　明	1990年1月20日
ビジネス英語文献比較(5) －Suasive Verbs の語法－	長　野　　　格	1990年3月17日
受動態について	渡　辺　洋　一	1990年5月19日
Margaret M. Bryantの *Current American Usage* 再考－形容詞の場合－	大　塚　賀　弘	1990年7月21日
英語の地名	鈴　木　寛　次	1990年11月17日
The Importance of Cause and Effect Expressions	篠　田　義　明	1991年1月17日
ビジネス英語文献比較(6) －人称代名詞について－	長　野　　　格	1991年3月16日
英語の色彩表現について	渡　辺　洋　一	1991年5月18日
マーガレット・ブライアントの *Current American Usage* 再考	大　家　賀　弘	1991年7月20日
英語の動詞の用法(1)	鈴　木　寛　次	1991年11月16日
これからの英語教育－ＥＳＰを中心に－	篠　田　義　明	1992年1月18日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　　表　　日
ビジネス英語文献比較(7) －ビジネス文献（日本）頻度調査報告－	長　野　　　格	1992年３月21日
Research or Do Research	渡　辺　洋　一	1992年５月16日
英語の動詞の用法(2)	鈴　木　寛　次	1992年７月18日
広告の英語について	大　家　賀　弘	1992年11月21日
Focusing on ESP in Discourse Analysis	篠　田　義　明	1993年１月16日
Meledicta に見るタブー語の世界	小　沢　悦　夫	1993年３月27日
代名詞所有格の使い方について	渡　辺　洋　一	1993年５月15日
It is + whether 構文の用法	大　塚　賀　弘	1993年７月17日
英語の動詞の用法(3)	鈴　木　寛　次	1994年１月22日
The Izu Dancer で無視された one word/one meaning	篠　田　義　明	1994年５月21日
ビジネス英語における‘order’と形容詞の連語について	長　野　　　格	1995年１月21日
現代英語変化の研究－社会言学的言語変化研究の諸例－	渡　辺　洋　一	1995年５月20日
発想転換の英語	鈴　木　寛　次	1996年５月18日
English Affected by Social Changes	篠　田　義　明	1997年１月18日

題　　　　　　　目	発　表　者	発　　表　　日
コンピュータによるビジネス英語分析－Pleaseの語法と語感	長　野　　　格	1997年５月17日
英語のメカニズム	鈴　木　寛　次	1998年１月24日
ＥＳＰと英語教育の関係	篠　田　義　明	1998年５月16日
分離不能性と所有代名詞の関係	渡　辺　洋　一	2000年１月22日
旅行実用英語から基礎英語学習へ	竹　田　正　明	2000年５月20日
英・米・加・豪の表現比較	長　野　　　格	2002年５月18日
英語運用に日本語能力が与える影響	篠　田　義　明	2005年５月21日
実用英語では Thinking in English は不可能	篠　田　義　明	2007年１月27日
日本語の無知から生じる英文のずれ：機能語を中心として	篠　田　義　明	2008年５月17日
The Inaugural Address of Barack Obama：Rhetorical Approach の一面	篠　田　義　明	2009年５月16日
企業で必要な英語の指導法	篠　田　義　明	2013年１月26日

日本実用英語学会会則

第１条：本会は日本実用英語学会（Japan Association for Practical English）、略称JAPEと称する。
第２条：本会は役に立つ英語を理論と実践面から研究しながら、会員相互の研究を促進し、知識や情報の交換、学術の振興をはかることに賛同した有志で構成される。
第３条：本会は次の諸事業を行う。
(1) 大会、研究会、講演会の開催
(2) 会誌の発行
(3) 研究に必要な資料の交換
(4) その他
第４条：本会の趣旨に賛同し、入会を希望する者および賛助会員は役員の承認を得て会員になれる。会員は規定の会費を納入するものとする。ただし、会員の期間は、原則として年次大会から翌年の年次大会の前日までとする。
第５条：会費は年額 6,000円（賛助会員：20,000円）とし、月例研究会費は別途徴収する（会員： 500円、非会員： 2,000円）。
第６条：会員は会誌の配付を受け、研究会、講演会に参加し、理事会の承認を得て発表することができる。
第７条：本会は同人組織にして、会の運営のため、次の役員を置く。
会長１名　副会長２名以下　理事若干名　幹事若干名　評議委員若干名
第８条：年次大会と総会は年１回とし、会長が招集する。月例研究会は１月と５月の年２回とし、会長が招集する。
第９条：役員の任期、選出方法を次のように定める。
(1) 会長は副会長を選出し、委嘱する
(2) 会長、副会長は、理事、幹事、評議委員を選出し、会長が委嘱する
(3) 会長、副会長は、運営委員を選出し、会長が委嘱する
(4) 会長は、役員を総会で報告する
(5) 役員の任期は２年とし、再任を妨げない
第10条：本会の経費は、会費・寄付金・その他の収入をもって当てる。会計年度は毎年年次大会の開催に始まり、開催前日に終わるものとする。
第11条：会の運営の妨げとなる行為をした会員は、理事会の議を経て、次年度の案内をせず、自動的に除籍できるものとする。除籍された者は、月例研究会にも出席できない。
第12条：学会誌への寄稿に関しては、内規を別に定める。
第13条：本会の本部は、会長の執務場所に置く。
第14条：本会の連絡先は、株式会社南雲堂内に置く。
第15条：その他については、役員会で決めるものとする。

日本実用英語学会・入会申込書

年　月　日

ふりがな 氏　名		生年月日	年　月　日
ふりがな 住　所・ 電話・ E-mail	〒 (　　)　－ E-mail:		
勤務先・ 電話	〒 (　　)　－		
紹介者			

略歴・業績など

事務局記入欄

会長承認印	役員承認印

日本実用英語学会・連絡先

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 361 南雲堂内

学 会 役 員

日本実用英語学会
（ＪＡＰＥ）

http://www.ia.inf.shizuoka.ac.jp/m-asama/jape.htm

本　　部　〒169-8050　東京都新宿区西早稲田１－６－１
　　　　　　　　　　　早稲田大学１１号館１３５４
連 絡 先　〒162-0801　東京都新宿区山吹町３６１南雲堂
電　　話　(03) 3268-2311 （代）

2014年２月27日　作成